

捻くれたRAILWARS～日本國有鉄道公安隊～比企谷八幡の闘い

おーあみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

千葉県内でも屈指の進学校、総武高校の二年生、比企谷八幡はある作文を提出し、呼び出しを喰らってしまう

そして、彼に告げられた事とは…

pixivにも同タイトルで投稿しています

R-15は保険です。要らなくなったら消します

R-18も必要になったら付けます

2/20 タイトル少し変えました

目次

比企谷八幡はOJT行を告げられる	1
研修といえど、最初は座学である	5
やがて、講習は終わりを迎える	11
またしても6人は集結する	22
公安隊といえど事務仕事も多い	27
番外編 八幡の目は 綺麗になった! ▼	32
初めての事件	35
カシオペア、そして帰還	46
再研修? いいえ高度研修です	53
足りない! モノ!	59
軽井沢デート…?	69
いざ! 高千穂へ…?	75
いざ! 高千穂へ…?	84
旅館、大浴場にて。	87
高千穂峡 〽 神秘的なその中で 〽	93
やはり俺達は常に彼女の掌の上なのだろうか	96
高千穂 (トランプ) 決戦	101
高森トンネル	105

比企谷八幡はOJT行を告げられる

国語教師であり指導部の平塚静は額に青筋を立てながら、俺の作文を読み上げた

「なあ、比企谷。私が授業で出した課題は何だったかな？」

「…はあ、『高校生活を振り返って』というテーマの作文でしたが」「そうだな。それでなぜ君は犯行声明を書き上げてるんだ？テロリストなのか？それともバカなのか？」

平塚先生はため息をつくと悩ましげに髪を掻き上げた

そういえば、女教師という漢字はジヨキヨウシよりもオンナキヨウシとルビった方がエロさが増すように思う

「真面目に聞け」

「はあ」

「君の目はあれだな、腐った魚の目のようだな」

「そんなにDHA豊富そうに見えますか、賢そうっすね」

ひくつと平塚先生の口角が吊り上がった

「比企谷。この舐めた作文は何だ？一応言い訳くらいは聞いてやる」

先生がギロリと音がするほどにこちらを睨みつけてきた。なまじ美人なだけにこういう視線は異様なまでに目力が込められていて圧倒させらせてしまう。つつーかマジ怖え

「ひ、ひや、俺はちゃんと高校生活を振り返っていますよ？近ごろの高校生はらいたいこんな感じじゃないでしゅか！大体あってますよ！」

「普通こういときは自分の生活を省みるものだろう」

「だったらそう前置きしておいてください、そしたらその通り書きま

すよ。これは先生の出題ミスであってですね」

「小僧、屁理屈を言うな」

「小僧って・・・ いや確かに先生の年齢からしたら俺は小僧ですけど」

風が吹いた

グーだ。ノーモーションで繰り出されるグー。これでもかというくらいに見事な握り拳が俺の頬を掠めて行った

「次は当てるぞ」

目がマジだった

「すいませんでした。書き直します」

とりあえず謝罪の言葉を選択。しかし満足行かなかった様子

「私はな、怒っているわけじゃないんだ」

「君、部活はやってなかったよな？」

「はい」

「よし、ではこうしよう。レポートは書き直さなくていい」

「え、マジっすか」

「但し条件がある。これを読め」

机上の封筒の山の中から一つの封筒を取り出す

「はあ、とりあえずなんすかこれ」

「それは自分で確かめろ」

そう言われて封筒の中身を見てみる

「えーっと、日本国有鉄道学生OJT研修？」

「そうだ、お前にはこれに参加してもらう」

「はあ、そうっすか・・・ っては？何いってんすか？」

「だから、その研修に参加しろってことだ。小論文については私も協力してやるから、問題はないだろう」

「いやそうじゃなくてですね、何故に俺が参加することにな」ビビュッ

またしてもすぐ横に拳が吹き抜けていた

「参加するよな？」ニコツピキピキ

「はい、します（汗）」

「そうか、やはり比企谷に頼んで正解だったな。これに免じてこれまでの事は無かったことにしてやろう。」

「はあ…。」

「小論文のテーマはなんだったか… そうだ、採算の取れないローカル線はどうするか、だったな。明日の放課後、3階の空き教室に来てくれ」

「はいはい… んじや、失礼します」

「そうか。くれぐれもバツクれないように。」

一週間後、また呼び出された

「先生、今度はなんすか」

「ああ、比企谷が。OJTの件だがな、国鉄から研修先についての書類が届いていたからな、しっかりと読んでおくように」スツ

「へいへい… んーと、日本国有鉄道 鉄道公安隊ですか… は？公安隊ってなんすか？」

「何かと言われても、公安隊は公安隊だ。国鉄構内なら逮捕権もあると聞いたが」

「なんでそんな物騒なところで研修なんてするんですか。普通研修生、それも高校生ならば雑務が適当でしょう」

「今年国鉄本社系列を希望した人間は全員ここらしいぞ」
「はあ…。」

「研修をするに当たって、全員が公安隊の短期講習を受けるとのことだ。場所は国鉄中央学園。中央線の西国分寺駅が一番近いからな。日時については別紙の紙を見てくれ」

「分かりましたよ… って、学校の方はどうなんすか？日数足りなく

て留年とか嫌ですよ？」

「そこは安心してくれて構わない。OJT研修で学校を空ける分には、出席扱いになるからな。仮に留年になりそうになっても、私がさせはしないさ」

初めて頼もしく感じました。なんでこの人こんなに魅力的なのに結婚してないんだろう。寧ろ本当に俺が貰っちゃうれベル」

「……………」

「ん？どうかしました？」

「いいいいいいやな、なんでもなないぞ／／／」

「いや噛みまくりじゃないっすか？本当にど「だだから、話は以上だ。君もか、帰りたまえ」

「は、はあ、失礼しました」

俺なんかしたかな、いや、したら拳が飛んでくるはずだし、何もしてないね

研修といえど、最初は座学である

眠い、眠すぎる

そもそも何故、休みの日なら基本家にいるような人間が、こんな朝早く外出しているのか

遡ること2週間

平塚先生に國鉄の学生鉄道OJTに参加しろと言われたからである

では何故、こんな早い時間帯に、電車に乗っているのか

遡ること1週間

平塚先生に、短期講習が西国分寺の國鉄中央学園であると言われたからである

千葉駅を6時40分に出る総武快速に乗っても、西国分寺には中央線への乗り換えを挟んで8時15分だ

國鉄中央学園まで徒歩で8分ぐらいだし、始業時間の8時30分には間に合う(はず)

ちなみに有名な話、総武線各駅停車は時間がかかるが椅子はそこそこ

総武快速線は時間は各駅停車よりかからないが椅子は硬いという千葉県民は究極の選択を迫られる

一応、快速線にもグリーン車という救済策もあるが、それに課金するのもバカバカしい

千葉駅から約2時間、西国分寺駅に到着した

國鉄中央学園は西国分寺駅のすぐそばにある

駅から5分ほど歩くと、新幹線がズドンと置かれている校門前まで到着した

マリンフィールドが複数個はありそうな土地。所々にいかにも高度経済成長期に建てたと言わんばかりの建物が建っている。

案内状に書かれた13号館に向かってひたすら歩く

曲がり角で少し案内状と睨めっこしていると、後ろから声を掛けられた

「あの、すみません」

「ひ、ひゃい？」

突然話しかけられるもんだから噛んだわ。話しかけるなら先に言ってくれ

「13号館ってどっちですか？」

「あ、ああ、多分右に曲がったところだな。お前も研修か？」

「そうだ。俺は高山直人。桐生鉄道高校の二年生だ」

「比企谷八幡。総武高校の二年生。その、まあ、よろしくな」

「うん。こちらこそよろしく」

目指す13号館は一番奥。ひたすら歩く

辿り着いた俺たちは、駆け足で階段を登り、指定された第206教室へと辿り着いた

入るとそこには40人ほどの学生が集まっていた

時間になると駅のベルのような音が鳴る

ガラッ

ベルの鳴動から1秒もズレることなく、教室の扉が開いた。入ってきたのは白い制服に身を包んだ女性だ。はつきり言おう。かなり美人。

その女性が教卓に着くと

「起立ー」

え、何、今の声どうやって出したの？マリンフィールドでやったら確実に響くよね？というか校舎全体に聞こえると思いますけども

「礼、着席。明日からは研修生番号1番岩泉から順番に日替わりで号令を担当しろ」

ほう。号令は日替わりですか。ってぼっちの俺に何を敷いているんですか

「返事はどうしたー！ここは今までのような遊び場じゃないんだぞー！」

「は、はいー」

岩泉とみられる人物が立ち上がって返事をした

「お前らに最初に言っておく！我々が扱うのはお客…つまり人の命だ。いくらお前らが研修生だろうがお客様にとつては関係ない。鉄道では一つの操作ミスが重大事故へと繋がる。現場ではお前らでもプロでなければならぬんだ。そこをよーく肝に命じておけ！それから、ぼんやりとした礼で済まされるのはこれが最後だ。上官に対しては敬礼だ！」

教室に一瞬の静寂が訪れ、教壇に立つ一人の女性に視線が集まる

「何度も言わせるな！」

『はいっ！』

あれ、何で俺も周りに合わせて返事してるんだか

この空気がそうさせてるのかな？確かに場の空気に合わせて存在を消すことはよくやるけれども。

「お前達は各都道府県の鉄道公安隊に配属される予定で、私のいる公安機動隊へは誰も配属されない予定だ。しかし…だ、各公安隊より現場での即戦力となるように教育をしてから、配属してほしいとの要請を受けた。そこで、私は多忙で本来お前らの相手をしているような時間は無いのだが、現場に使えない奴が来ては大きな事故に繋がってはかなわんと思つてな、特別に教官を務めてやることにした。ありがたく思え！」

『はー！』

さつきよりと心無しか声が大きくなったような気がした

研修と言つても、最初一週間は座学で鉄道や法律に関する知識を叩き込まれる

そして、連日最後には筆記テストが実施される

ここで赤点を取ろうものなら、翌日再テストとなる

「うおおおお、また一枚増えんのか！」

そんな岩泉の悲鳴が聞こえるのは毎日恒例となつていた
そしてそのテストは成績の良い順番に返される

高山が今話しかけている女子がそれだ

「小海さん、毎日トップって凄いね」

「えっ!? あっ… そんなの… 大したことないですから…」

ん? 俺には「こんな問題、簡単だから」って聞こえるんですが

つまり、テストで毎日トップを取り続けているのが、この小海はるかだ。

たがしかし、テスト用紙を受け取る時の返事が小さい為か、「腹から声を出せ!」とこちらも一週間怒られ続けた

岩泉と小海ってある意味両極なのだろうか

そこにツカツカと一人の女子がやってきた

「こんなところまで来て、まだ女の子をナンパしてられるって余裕ね!」

そこ声の方を見れば、栗色の髪をアップスタイルにした女子が腕を組んで立っていた

傍から見ればら美人の部類に入るだろう

だがしかし、人間というのはそう上手く行かないものである

時に刑法の一環で痴漢に関する法律についてやっていた時であった

「痴漢が自身の身許を明かさず、逃走を図ろうとした場合はどのような対処すべきか!」

その場合はステルスヒッキーをフル活用してこっそりその場を去ります

そんな考えを俺が巡らしているうちに、桜井がすつと手を挙げあ

「桜井だけか。よし! 言ってみろ」

力強く立ち上がった桜井が、真剣な目付きで言った

「射殺します」

…
へ?

背筋になにか冷たい物が走るのを感じた

男子は揃って教官に注目する

「そうだな… そんな時代が来るといいな… 私もそう思う。しかし、桜井、今はダメだ」

そりやそうだ、今の世の中で痴漢が撃ち殺されるようだったら世の中の男性は怖くて外にも出れん

「はい、わかりました教官。大変残念です」

…彼女らが幹部クラスにならないことを祈る

そこから、男子にとっては「男嫌いの桜井」として、一週間で既に有名になっていた

そんな桜井に目をつけられた高山も、随分と災難である

「別にナンパなんかしてないの。単にテストの成績を褒めていただけさ」

「そう、それだけだよ。あおいちゃん」

高山よ、お前いつの間にもその小海さんとやらと仲良くなった

「ふーん。そうかしら？ どうせ、はるかのおっぱい、でけーとか視姦してたんでしょう！」

その時高山の視線がそちらに向いた

高山よ、お前はそんな奴だったのか

「きゃっ!?!」

そして小海は驚いて胸を寄せるようにして隠そうとした

より強調されてあぶないですよ

「違うって、そんなこと考えてないよ小海さん！」

「はるかっ！こんなのと話してると子供できちゃうよっ」

「うっ、うん」

…話してるだけで子供が出来るってどうなってるんですかね、そんなこと言ったらうちのクラス全員子供出来てると思うんですけど

「なんでE F 6 6だけで、電気機関車ってわかるんだあ！」

岩泉の絶叫が響きわたりました

「何が分かんねーんだよ」

高山が岩泉に聞く

「E F だけでよおおお」

「わかる、分かるぞ岩泉。俺だってD D 5 1 っって聞いただけでなんでディーゼル機関車って分かるのかさっぱりわからん」

そこに意外にも、小海さんともう一人、赤髪の女子がやってきた

「EFのEは電気のelectricですよ。そして次のFはAから数えて六つ目だから六個の動輪があるってことです」

「DDのDはdieselのD、次のDは動輪がAから数えて4個だからDなのよ」

赤い髪の方。確か西木野つつたか。筆記テストは毎回のよう
小海の次だったような。何故かちよいちよい俺に教えてくれたりす
る

「ああ、ありがとう…小海」

「お、その、さんきゅーな」

しかし、その返答も三者三葉という言葉があるように

「同じ研修の仲間だから…」

「べ、別にあんたのために教えてあげてるわけじゃないんだから！」

「こいつら、覚えが悪くてねっ」

「勉強だけだったら、少しお手伝いできますよ」

「勉強だけなら、別に、教えてあげてもいいけど」

「ありがとう。俺、一人だと分からない所もあるからさ、助かるよ」

「お、おう、そうか。それじゃ頼むわ」

「わ、わかったわ！じゃあ…」

高山には小海、俺には西木野がそれぞれ横に座り、分からない所を
遅くまで熱心に教えてくれた

その成果か… 岩泉も後半は赤点を取らない日が多くなった

やがて、講習は終わりを迎える

この短期講習、もとい特設公安科短縮講習では、普通に生きていれば体験することのない多くのことを体験することになる

今日に到っては射撃訓練である

国鉄職員全員が拳銃を所持している訳では無い

しかし、鉄道公安隊には拳銃所持が認められているのだとか

… 桜井には絶対に持たせてはならない、そう思うのは俺だけではないはず

鉄道公安隊員全員に年間50発の射撃訓練が義務付けられているのだとか

そして俺達は警察学校に連れていかれている

当たり前だが普通に生きていれば銃なんて使うはずがない

拳銃は38口径リボルバー6発弾倉

訓練は左右の壁にあるブースに一人ずつ入ってきたそれぞれ奥の標的に向かって撃つ

この銃、ダブルアクションという種類で、撃鉄を起こすことなくトリガーを引くだけで弾丸は発射される

両手首にしっかりと力を入れ、一発目を撃つ

ダアーン!!!!

目標から上にそれた

「びびってないで、しっかりと持って連続で撃ち込め！」

「は、はい!!」

5発うち尽くせばカチッと空振りする音がする。そうすれば弾倉を横へ出し、薬莖を台の上に出し、また五発詰めて撃つ、これの繰り返し

ここまで40発、残り10発は検定に使う

目標となる小さな人形の標的をワイヤーに付いたクリップに固定し、赤いボタンを押すと奥へ移動し約20メートル先で止まる

さつきから撃っている、狙った所から上にずれているのに気づいた俺は、目標の中心の少し下を狙う

「ダアーーン！ダアーーン！ダアーーン！ダアーーン！ダアーーン！ダアーーン！」

五発撃つては弾薬を詰め替える

「ダアーーン！ダアーーン！ダアーーン！ダアーーン！ダアーーン！ダアーーン！」

10発撃ち終え、的を手元に戻す

10発中2発が中心近く、5発程が中心から10センチほどズレた所に散らばっている

俺がブースを出て、特にやることもなく眺めていると、なんかどっかで聞いたことのある声があった

「あくもう！どうして真ん中に当たらないのよ！」

西木野ですねそうですね。

仕方ない、座学の件もあるし軽くアドバイスしてやっか

「あー、そのなんだ、肩に力入れるな。手首に力入れるようにしろ」

「えっ！あ、こう？」

「あと、目標の若干下を狙え、多分そうしたらある程度は当たるはずだ」

「あ、ありがとう」

その後検定の様子を見ていたが、10発中4発命中と、初心者の俺が言えることではないが、かなりいい方ではないのだろうか

「あ、あの、比企谷くん」

「ん？どうした、俺になにか不満か？」

「ち、ちがうわよ！その、さつきは、ありがとう」

「お、おうそうか」

未だに女子と話すのってあまり耐性がありません

そして、またしてもあの女がやりやがった

「教官！私は男どもと同じ弾丸の使用を希望します！」

俺達と同じ弾丸とはどういうことか、これは女子が弾薬を半分削って反動も少なくなっているライトロードという弾丸を使用して

いるからである

ジロリと教官は桜井を見ていった

「桜井か… お前少しは…」

「私は父に従って数十回海外で経験しています！」

目を閉じて少し考えた後、教官は言った

「ではいいか… よしつ、使用を許可する」

「ありがとうございますー！」

パチんと指を鳴らした桜井はニコニコ顔で、男子と同じ弾丸を教官から受け取った

1連の動作を見る限り、只者ではないと予感させる

… 検定を終えた標的を見ると、男子全員が凍りついた

人形の標的の頭に一発、心臓に一発、そして男の急所に八発穴が空いている

特に股間については撃ち込みすぎにより大穴になっている

「どう、私と打ち合いする？」

「なんでだよー！」

高山よ、ご愁傷様さまとしかいいようがありません

—————

短期講習も最終週を迎える

もう残り1週間かと思うやつもいれば、まだ1週間あるのかと思う

やつもいる

ちなみに俺は前者である。もっと過酷かと思っていました

だがしかし、この講習、あとに行けば行くほど険しい山になる

知識だけではなく体力も要求されるこの講習

その体力モノの最高峰が今から行う投炭訓練である

「投炭訓練を行う！全員第二車両整備場へ5分以内に集合！」

スピーカーから流れる教官の指示に従い、俺たちは作業服に着替え

て大きな屋根のある整備場へ駆け足で集められた

…… あちい、体が溶けちまいそうだ

「おはようございます整備班長！こいつらをよろしくお願いします！」

「おお、来たかゆとり教育世代。今年は何人残るかな」

「さあ、最近は全員ひ弱ですから、今年あたり全滅やもしれません」

「そりや楽しみだな」

教官は俺達の方へ向き直る

「本日は投炭訓練を行う。全員このC62で時速100kmを出すまで終われないからな！」

えっ、どーゆーことですか

「今更、こんなもんの運転を学んでどうすんだ？とか思ってただろう！そこがお前達の浅はかなところだ。蒸気機関車は鉄道の父だ！蒸気機関車ができて初めて鉄道が出来たのだ。だから今の規格はすべて蒸気機関車の頃に合わせて作ってある。そういうことを理解しておかないと電車だろうが新幹線だろうが動かすことはできないのだ！分かったか！」

『はい!!』

「よし！二人ずつのチームを作れ！」

ピツと教官が笛を吹き、チームに分かれる

高山は既に岩泉と組んでいるようなので、仕方なく西木野と組むことにした

あっちもあっちで相手いなさそうだけど

「今、私が相手いないから困ってるのか思ってたでしょ」

「いや滅相もございません」

お兄さん感の鋭い子は嫌いよ

「まあ、よろしくな」

「ごっちこそ」

その後、高山にごっさり聞いてみた

「なあ高山、100kmってどんぐらいやればいいんだ」

「大体1分で60キロぐらいの石炭を叩き込まないのかなあ」

「…そうか」

絶望を見た気がした

俺と高山が話していると、横から何か入ってきた

「何、はるかのおしりジロジロ見てんのよ！」

桜井です。またです。高山くんお疲れ様です

「いつ、いやっ!？」

小海が慌てて隠そうとする

「桜井、女だけのコンビで大丈夫なのかよ？」

「女だからってバカにしないでっ、いつでも力で押さえつけられると思ったら大間違いよっ！」

「本当お前ら仲良いな」

そんな事を適当に行ってみれば

「違うわ（よ）！」

ほーら一致してんじゃん

ピッ

前を向くと教官が笛を口にくわえて、仁王立ちで立っていた

「元氣そうだな！では、お前からやらせてみる！」

えっ？俺も？冗談だよな？

「見てなさいよ。男だけじゃないって教えてあげるわ」

「ったく、かわいくねーな」

「かわいくなくて結構よっ！」

桜井と高山が睨み合ってるのを横目に、俺と西木野は機関車に向かった

C622

C623

C6225

高山

比企谷

桜井

岩泉

西木野

小海

運転席に敬礼しながら、それぞれの機関車の運転台に乗り込む
運転席には整備班の人が座っていて、研修生はボイラーに石炭をく
べる

「西木野、キツかったら言えよ」

「あ、べ、べつに大丈夫よっ」

「よーい。始め！」

教官の声で一斉にスタートする

ズウアアアアア

シユ、シユ、シユ…

「先に俺がやるから、少しずつ疲れないように交代しながらやるぞ」
「わかったわ」

運転台の真ん中に石炭を入れる扉があり、足元のペダルを踏むと左右に開き石炭を入れることができる

無論、中で火が燃えているので、扉を開けば熱風が吹き込む

石炭を掬い、ボイラーに入れる簡単な作業だが、シャベルで黙々と入れ続けるのはかなり辛い

更に最悪の状況を想定してこそ訓練と、防毒マスクをしているのが追い討ちをかける

「代わるわ」

「おう、わりい頼む」

「まっかせなさい！」

そのあと俺たちはだいたい8分ペースで交代を続けながらやっていったが、ある時を境に高山と桜井達も80キロぐらいで止まってしまった

「…なんで上がんねえんだ？」

「私に分かるわけないでしょ！」

「俺も蒸気機関車なんぞ触るのは初めてだし…」

すると、なんかデカイ声が聞こえた

「燃焼効率だぁー！！！！」

高山か

「…っ！そうよ！燃焼効率よ！」

「ん？なんだそれ」

「授業でやったでしょ、まあいいわ。私が言う方に石炭を投げ入れて」

「おう、んじや指示頼むわ」

「了解。まずは右奥、次に右手前…」

そう入れている内に、西木野も一緒に投げ込みを行っていた

他のやつとだったらもう俺は挫折していたかもな。西木野には感謝だわ

3つの機関車が同時にこんなことをやれば煙もすごいわけで、あたり一面が凄いことになっている

ピイイイイ

「ん？なんだ」

「比企谷、西木野と岩泉、高山そこまで！」

前の速度計を見てみれば速度は100キロに達していた

「はあ…終わったか」

若干力が抜けてふらつく

「ちよ、ちよつと、大丈夫!？」

「ああ、軽く疲れただけだ。それよりも、西木野。ありがとな。お前じゃなかったら諦めてたわ」

「えっ、その、私こそ、比企谷君じゃなかったら諦めてだろうし…あ、ありがとう！」

こいつ根は優しいんだな

そこから少し間を置いて、桜井小海ペアも終わったようで

運転台で桜井が倒れれば教官が

「無理しやがって。岩泉、高山。そのの担架を使って桜井を医務室へ運んでやれ」

「はっ、はいー！」

担架がすぐそばに常備されてるってどういう状況だよ

その後聞いたが、100kmに到達できたのは俺たち6人だけだという

「高山と岩泉にひっぱられて、桜井と小海、比企谷と西木野のチームも出来たってことか。まあそれだけじゃないんだろうがな…。」

と言つて、なんと二日間テストが免除された

—————

こんなに過酷な訓練だし、これ以上の地獄はないと思つた時期が俺

にもありました。はい

自衛隊の体験入隊

これも昔からの伝統らしく、材木座のように重いリュックを背負い、弾丸の入っていない銃を担ぎ、一日中コミケを戦い抜くと考えたらしい

そして列車防護訓練

発煙筒を持った右手を降ろさずに、学校の制服で600m先まで全力で走る

しかも靴は革靴で線路の枕木と呼ばれる部分を選んで走る。かなりきつい

更に、普段の日常ではまったく使わない動作まで覚えてしまった

それこそ、敬礼である

俺みたいな専業主夫ライフを指すような人間からすれば、関わりのないようなものである

たがしかし、これも公安隊では挨拶。覚える他ない

毎日ずっとやっていたら、手の平の角度も揃ってきて、突然でもできるようになってしまった

そして遂に研修の最終日

流石に最終日は訓練無しで、午前中のオリエンテーションのみ
プルプルプルプルプルプルプルプル：

三十日前からずっと、遅れることなく五能教官が1秒も遅れること無く教室に入ってきた

「起立！」

流石に1ヶ月もすれば、椅子を立つ音、足を揃える音がすべて整う
「敬礼！」

… 二の腕は水平に、手の平は下を向け指先派まつすぐに

「… 着席」

全員一斉に座る

まるで1ヶ月前とは別人である

教官はこちらを見回してから、研修中で初めて笑顔でこちらを見た
「全員ご苦労だった… 正確には機能を持って特設公安科短期講習は

全て終了だ。今日からは半人前ではあるが諸君らは鉄道公安隊員だ。今日まで厳しくやってきたが、それは我々が人の命を扱う仕事だと認識してほしかったからだ。鉄道公安隊は警察でも自衛隊でもなく、お客様に楽しく旅行をしていただいたり、毎日快適に通勤していただくサービスを提供する鉄道会社『国鉄』の職員なのだ。だから・・・」

教官はチョークを手に取り、黒板に

強く・正しく・親切に

そう大きく書いた

「これが鉄道の安全を守る鉄道公安隊のスローガンだ。現場に出たらお客様を犯人のように疑うようなことは絶対にするな！お客様には親切に接しろ」

少し間を置いて、教官は最後に言った

「しかし、お客様の迷惑になるような奴には、どんな理由があろうとも戦え・・・いいな」

その後、現場に出る心得を1時間ぐらい聞いたあと、鉄道公安隊手帳が卒業証書のように、一人一人に手渡された

たった1ヶ月の講習であったが、緊張感が途切れたせいか、高山に岩泉、小海も泣きながら敬礼して受け取っていた

ちなみに俺はって？少し泣きそうになったけどギリギリで堪えました。OK超クール

ただ涙目の西木野はちよつとレアかも。ただ言ったら軽く絞められそう

そして、全員に手帳を渡し終わると、教官が退出し、研修の全てが終了した。

初めて全員同じ時間に終わることができたからか、高山に誘われて、揃って西国分寺駅まで歩いた

「いろいろありがとう・・・高山君」

「こつちこそ・・・みんなのお陰で、楽しくやれたよ」

あら、あつちでまたまた、高山は常に横に女子がいますね

「ねえ、ちよつと聞いているの？」

「うお、びつくりした」

「気づいてたんじゃないの？」

「いやマジで気づかんかった」

「そう…は、八幡も、すっかり現場で働きなさいよ！」

「お、おうそうか。まあできるだけやるさ。善処する」

「私だつて、アンタには負けなから！」

「あーそうか、わーったわーった」

「それじゃあ、じゃあね」

「おう、こつちこそ、ちゃんと働けよ」

「わかつてるわよ♪」

「高山！女ばつか追いかけてないで、ちゃんと現場での研修やんなさいよー！」

「あら、高山は今度は桜井に絡まれておられる。次から次へと…」

「そつちこそ、男とうまくやれよ。女の人を優遇している國鉄とは言えまだまだ男社会だぞ」

「分かってるわよーでも、戦わなくちゃ何も始まんないじゃない！」

ホームに東京方面行きの電車が滑り込んでくる

ちなみに俺は小町に八王子でもなか買ってきてくれと頼まれたもんだから、一旦八王子に行つてから帰る

「じゃねっ！」

桜井は小海の手を引っ張つて改札口へ走り出した

「あつ、あおいく。それじゃあ！また！」

顔だけ後ろを向けて転びそうになりながら、軽い会釈をして電車に飛び乗った

「それじゃな岩泉と比企谷もつ、帰つてから少しは勉強した方がいいぞ」

「高山も体力つけろよ」

「そうだぞ高山。俺が言えることではないが危機管理能力をもう少し高めた方がいいぞ」

「今から頑張つても筋肉バカにはなれないし、そんなに危機管理能力を高めることも出来んわ！」

「それは勉強と同じだな」

「そうだなっ」

珍しく3人で笑いあつた

「じゃな！」

俺たちは敬礼で別れた

しかし、これは講習であつて、研修ではない

現場での研修、これ以上って何が待っているんだ…

またしても6人は集結する

またしてもかなり早い時間に、今度は東京駅へと向かっている
西国分寺よりはマシだが、やっぱり遠いまま

インターネットで少し調べただけだが、東京駅の一日の平均乗降客数は約439000人。それに対して東京中央鉄道公安室は70名。一人あたり約6270人を相手にする。俺みたいな人間には鬼のような仕事だ

かなり気が重いが、ここまで来た以上引き下がるわけにも行かない
丸の内側北自由通路に入ろうとすると、なんか見慣れた顔がいた

「ん？お前高山か？」

「比企谷か！お前もここ？」

「そうだ。お陰様で朝早くから起きなきやだよ」

「それはお互い様だ」

そして、自由通路入ってすぐにある東京中央鉄道公安室の扉を押し開く

そして、敬礼をし

「申告します！本日付で東京中央鉄道公安室第四警戒班に、学生鉄道OJTに参りました高山直人です！よろしくお願いたします！」

「同じく、本日付で東京中央公安室第四警戒班に、学生鉄道OJTに参りました、比企谷八幡です！よろしくお願いたします！」

「おっ、今年は元気がいいのが多いなあ」

「よく来たな新人」

などと声がかかり、何人かが拍手で迎えてくれた

なんか照れるけど平常心、平常心

「高山！比企谷！来たか」

・・・ 平常心で保つのはもう無理だ

そこには、東京公安機動隊隊長が凛々しい姿で立っていた

「ご無沙汰しております。五能隊長」

「ご無沙汰と言うほど日は立ってないだろう。それと、研修では訓練のために詳しく言わなかったが、所構わず手を挙げて敬礼しなくて良い。その挙手敬礼をするのは、外で帽子をかぶっている時にする専用のものだ。室内や帽子を取っている場合は普通にお辞儀でいい」

「ここは現場だ、肩の力を抜いてあまり固くするな」

「はい、まだ何もわからぬ若輩者ですが、よろしくお願いします」

「まだ未熟者ですが、よろしくお願いします」

「高山、比企谷、よく来たな…」

俺達の両目を見つめた隊長は、ポンと肩を叩いてすれ違いながら言った

「ここは、鉄道公安隊子中でも最高の場所だ、せいぜい楽しめ！」

公安室を出ていく隊長を見送るように、背中に向かって叫んだ

「ない！頑張ります」

隊長な振り向くことなく、右手をちらつとあげて答えた

「君達が高山くんと比企谷くん？」

振り返るとキョロつとした大きな目の小さな女の子の人が立っていた

「はい、そうですが」

「あ、はい。そうです」

「じゃ、研修生ね。こっちへ来てくれるかなあ？」

なんとというか、気の抜けた感じである

その人は、廊下に出てすぐの扉を指差し、

「そこが着替えるロッカールームで、右奥に君達のロッカーがあるから、中にある制服にきがえてからこっちの会議室へ来て」

「はい、すぐに行きます！」

「終わり次第すぐ行きます」

「フフっ、ゆっくりでいいからねっ」

比企谷と書かれたロッカーを開くと、中には紺の制服が一着、上下セットで吊られていた

上着に袖を通し、公安隊手帳を内ポケットにしまう。折畳み式警棒、公安隊マークの入った手錠をベルトに取り付ける

制帽は小脇に抱え、扉を開く

「ええっー!?!」

「……………は?」

なんでよりによつてこいつらが

「やっぱりねっ、そんな気はしてたのよ」

「まあ、こうなるわよね…………」

口の字型に並んだ会議テーブルに、扉側から桜井、間に一席開けて小海、桜井の向かい側に岩泉、岩泉から一席開けて西木野が座っていた

「こんにちは………… よろしくお願ひします」

「よっ、高山!比企谷」

ただし、公安隊の制服を着ていれば何故か誰でも真面目に見えてしまう

ああ………… またとんでもない日々が始まってしまうのか…………

「みんなはあ、短期講習で会っているからあ、自己紹介は私だけでいいわよねえ?」

当然みんな頷く

「今日からあ、君たちの面倒を見ることになりまゝす。東京中央公安室、第四警戒班班長飯田奈々でゝす。ちなみに第四警戒班はみんなからは警四つて呼ばれてまゝす。よろしくねっ!」

………… 班長だったのか

なんとというか、五能隊長とは真逆である

しかし、如何なる時も危険分子とは黙っていられないものである

「飯田班長!」

「ああ、それとお………… 私のごとは、飯田さんでいいからねっ」

更に強いトーンで言う

「第四警戒班つて、これだけなんですか!」

「そうですよお。ここは第一捜査班、第二捜査班、第三警備班とあつてえ、それぞれ十数人ずつ交代制で担当しているんだけどお、なんて言うのかなくやっぱり学生さんだといきなり一緒に働くのも大変じゃない?だから、第四警戒班は、いろいろなお仕事に臨機応変に対

応するってことでえ…。」

そんなかな〜り緩い感じで話していた飯田さんに、桜井が…
ブチ切れた

「要するに単に研修生は『雑用でもしてろっ』てことですよね！私はここへ仕事をしに来てはいるんです！そんな甘い配置ではなくて、1班から3班の人達と行動を共にして、極悪非道な男どもを相手にさせてください！」

では犯罪者が女性であつたらみすみす見逃すということでしょうか

「まあまあ、研修は長いからさっ… そのうち現場で皆さんと一緒に仕事しなくちやいけなくなると思いますからあ。最初は気楽にねっ」
「そんな！あなたみたいなのがいるから、女というだけで」バカにされるんです！しかも警四なんて言われて、完全にバカにされてるじゃないですか!!」

「おいっ！言いすぎだろ桜井」

「流石にそこまでは言わんでもいいだろ…。」

「つついっ！俺も口出しちゃったよ」

「何よっ高山！本当のことですよ！」

俺は気づかれていない模様。アウトオブ眼中

「そうよあおい、そこまでは言わなくてもいいと思うけど」

西木野も参戦

「真姫まで！このままだと研修中まいに「まあまあ、桜井さんの言ってることも間違つてはないからねえ。ありがとうね高山くんと比企谷くんに西木野さん。私の為に怒ってくれてえ〜」

「あのっ！飯田さん！」

飯田さんは桜井に、ストップと言うように手のひらを見せた

「桜井さん。お仕事はどんなことでも大事なお仕事だから、どうでもいい仕事とか重要な仕事とかの区別はここでは無いから、それだけは忘れないでねっ」

その時の飯田さんの表情は、とても真面目なものだった

「そつ、それは：：」

小海はほつとして「助かった〜」って顔でこちらを見ている
やさしい表情ながら、桜井のような暴走奴でも黙らせてしまう独特
の雰囲気があった

そこに岩泉が、ゆっくりと腕組みを解いてから言った

「高山：： 桜井、比企谷：： 西木野：： こんなところでイチヤツくな」

「違うわっ!!」

「違う（わよ!）」

岩泉の一言により、話はそこで終結した

公安隊といえど事務仕事も多い

今回の研修について簡潔にまとめるところだ
配属されるのは鉄道公安隊だが、第四警戒班はお客様対応とかの雑用メイン

つまり、凶悪犯罪者と戦う必要はないようだ

…が、実際とんでもない悪魔がいるから分からないが
そしてメンバーも大変個性的である

高山直人 自称ド安定人生を目指す

岩泉翔 脳筋

比企谷八幡 捻くれてる

桜井あおい 悪魔

小海はるか 記憶力

西木野真姫 ツンデレ

班長 飯田奈々 ほのぼの

かなり大まかな感想はこのぐらいだろうか

閑話休題

俺たちは、まず駅一番の実力者に会いに行くことにした。

これも飯田さんの勧めである

東京駅に配属された者は、最初に駅長へ挨拶しに行くのが慣例なんだとか

しかし、6人＋1人全員で駅長室に行こうものなら、駅長も大変なので、朝九時前に新幹線ホームに行く

高山から聞いた話だが、東京駅の駅長は現場の最高職であり、運転手、車掌、駅員、機関士などの全ての職員が最後にはなりたいような地位らしい

現在でも国鉄理事以上が担当する雲の上の存在。

そして東京駅の駅長は、蒸気機関車が走っていた時代から、毎朝九時に発車する特急列車を見送る習わしがあったそうだ

15番線に、その列車が滑り込んでくる

到着し、乗客を乗せると、出発を知らせるメロディが鳴り、ゆつくりと新幹線はホームを離れていく

年齢から来るものなのか？メタボな体つきだが、電車を見送る姿勢はシャキツと背を伸ばし、汚れ一つ無い真っ白な手袋をはめた右手はまっすぐにココに伸びている

「よしっ！」

駅長は線路を指差確認したあと、俺達に丁寧に頭を下げて挨拶をしてくれた

「私は東京駅長の片町です。今年の学生鉄道OJTの皆さんですよね？」

「桜井あおい以下6名。東京中央公安室第四警戒班に配属されました！」

何故か桜井が一步前に出て、ニコニコしながら敬礼している

「警四と言えば飯田くんのところですか。彼女はとても優秀ですから、研修生としては最高の時間を過ごせそうですね」

やっぱり警四なんですね。いつそのこと第四警戒班から警四に短縮した方がいいのではないのでしょうか

「そうでしょうか・・・」

桜井は今にでも不服申立てでもしそうな顔

「あと6人は小海くん、西木野くん、比企谷くん、岩泉くん、高山くんですね。東京駅の治安をよろしく願いますよ」

・・・なんで平社員以下のような俺の名前まで覚えてるんだこの人は

「僕らみたいな研修生の名前まで覚えていらっしやるんですか？」

高山の質問に駅長はポンポンとお腹を叩きながら笑って言った

「はっはっは、たまたまですよ。今年は小海お嬢さんと西木野お嬢さんがいらしたもんですから」

駅長は小海と西木野に向かって笑いかけると、二人とも微笑み返した

あの二人の関係性がわかりません

「片町のおじさま・・・ あっいえ、駅長お久しぶりです。おじい様がま

たお時間があれば、お寄り下さいとおっしゃっていました」
「ありがとうございます。そうですね…。時間が合えば、またぜひ…」

「片町駅長、お久しぶりです。パ… お父様が、今度時間さえあれば、お食事でもどうぞでしょうと…」

「そうですね。では、時間があれば、是非とお伝えください」

そして駅長は笑顔で俺達に言った

「では、お願いしますね」

二人ともだが、やはり関係性が掴めない

片町駅長が歩き始めたところに数人の駅員が寄ってきて、何か報告をしている

すると、駅長は急いだように階段を降りていった

「は…る…か…」

「なっ、何? あおい…」

「それに真姫も…」

「ど、どうしたのよ…」

「どうして、東京駅の駅長とお知り合いなの!?!」

それは俺も聞きたい

小海は頭をかきながら照れた

「えへへっ、おじい様が國鉄に勤めていらっしやっただので、その時のお知り合いなの…」

「パ… お父さんが国鉄総合病院の院長なのよ」

「本当に!? まだ、なにか隠してるんじゃないの?」

「ないない、ほんとだっつー!」

「何もないわよっ!」

その後、二人とも桜井のヘッドロックによって締めあげられていたが、新しい家族情報は出てこなかった

まあ、自衛隊や警察、市役所といった公共機関では、親子で同じ仕事をする人が多いという。但し、親が社畜の場合、子は専業主夫になりたがるのではないだろうか。ソースは俺

公安室へ戻ると、飯田さんに言われて受付に座った

受付には、ひっきりなしに人がやってくる

しかし、俺達に危ない仕事が出来るわけがなく、忘れ物や盗難の調書をとったり、道案内をしたり、皆さんのお茶を入れるなど、簡単な仕事を処理する

そんなこんなで数時間、無事初日の業務が終わった

学生服に着替えてロッカーを出ると、何故か西木野と鉢合わせした腕を組んでこちらを見てらっしゃる。俺なにかした？

「ねえ、今暇？」

「…」

「ここは聞こえないふりに限る。1度手を出すと面倒だし

「ちよつと！聞いてるの？」

前言撤回、腕を掴まれた。むしろ面倒だった

「何だ」

「だから、今暇かって聞いているの！」

「いや、全くもって暇じ「じゃあ、ちよつとこっち来て」

俺の意見は無視ですか…

そうして俺が連れていかれたのは東京駅前の広場のようなところ

近くのベンチに近くの自販機にあったマッ缶を買って腰掛ける

しっかし東京駅にマッ缶があるとは、わかってらっしゃる

「その…は、八幡は何でOJTを受けようと思ったの？」

なんて痛い所を突いてくるんでしようねこの子は

「あーその、何だ、「行った方がお前の為になる」って言われて来ただけだ」

「クスッ」

「な、何だ、何かおかしいか」

「いや、何か私と似てるなって」

はて？共通点はさっぱり思いつきませんが

「私のお父さんが国鉄病院の院長だって言ったでしょ。それで、「今の内に国鉄に人脈を持った方が後後便利だ」って言われて、勝手に応募されて、通っちゃったのよ」

成程ね、やっぱり親が権力者だところなっちゃうのね

「まあ、その何だ、そうやって強制？されたもんでも、ひたむきに向き合って力を注げるってのも、いいんじゃないやねえのか？」

西木野の方を見ると、何故か頬が紅潮してらっしゃいました
「ななな、何よ急に！」

拝啓、ラブコメの神様、俺はどこで道を間違ったのでしょうか

「ま、まあ、その…ありがと。八幡。じゃあね」

「お、おう。そのじゃあな」

そして西木野と分かれて帰路につこうとする

……あれ？総武線のホームってかなり遠くね？

予想だにもしない重労働となってしまうた通勤時間であった

番外編 八幡の目は 綺麗になつた! ▼

研修2日目の朝

ピピピピ…ピピピ

「ふぁーねみい」

只今のお時間、朝の5時半である

無論、まだ小町は起きてるはずもない。というかこんな朝早くに起こすのもどこが気が引ける

では朝食はどうするか? 俺だって腐っても専業主夫志望な訳だし、ある程度なら料理だってできる

パパッと卵を混ぜて、スクランブルエッグを作り、適当な野菜を盛ってテーブルに置く

ふと目に入ったのは、テーブルに置いてあつた箱である

何か紙も挟まつてるし、一体なんだろうかと
とりあえず箱の中身を見てみる

パカッ

…何でメガネ?

それも俗に言う縁なし眼鏡というやつ
一緒に入っていた手紙を読んでみれば

お兄ちゃん、鉄道公安隊で研修なんだって
あのごみいちゃんがそんな研修受けるなんて小町びっくりだよ

それより、愛しの小町から就職祝いにプレゼント♡
これから公安隊に行く時は必ず掛けること♡

何でメガネなんだ? 俺視力そこまで悪くないぞ

何で考えていたが、よくみると伊達メガネだ。レンズの様なものが入っているが、度は全くない。強いていえば、ブルーライトカットがあるぐらいだ

メガネを掛けて洗面所に行つて鏡と向き合うと、大変衝撃的な事実

が判明した

「……目が、腐ってない…だと」

そこには誰だか分からないただのイケメンが立っていた

「……いやいやいや、気のせいに決まってるだろ。きつとまだ寝ぼけてんだわ」

思いっきり冷たい水で顔を洗い、メガネを掛けてもう一度鏡をしてみる

「…………マジかよ」

比企谷八幡は、目の腐りが取れた！▼

電車で揺られること数時間

流石に今日は寝たかったし、仕方なくグリーン車料金を払って1階席に座り、無事寝ることができた

「おはよーございまーす」ガチャ

既に飯田さんがいた

「……………？」

なんか、こつちみてポカンとしている

「ええーつとお、班間違えてるかなあ？」

目が腐ってないところなっちゃうんですね

「あーはいはい、これならわかるっすよね」

メガネを外してもう1回見ると、飯田さんはああくつて顔しながら

「比企谷くんねえ〜」

「あの、俺って目だけでそんなに変わりますか？」

「そうねえ〜。メガネかけてる時なんてただのイケメンだったしねえ〜」

これはメガネを掛けてると危険だ。いらぬ注目を集める可能性があるあるな

「でもお〜私はいつもの比企谷君もいいと思うけどなあ〜」

「そうっすか」

とりあえず基本的には外しておくことにしよう。ブルーライトカットのはずだし、スマホとかPC使う時だけかけるか

「おはようございます」ガチャ

「おはよう〜西木野さん〜」

「八幡もおは…」

あれ、凍りついてらっしやる

「あー、はいはい」

メガネを外すと、急にフリーズが解けました

「え、ど、どういうことよ」

「そのお前が今見たメガネの男とここにいる目の腐った男は同一人物ということだ」

「ま、まあ、私に分からないわけないじゃない」

「はいはい、わかったわかった」

そうして西木野は定位置の俺の右側の席に座る

そして小声で

「そ、その、メガネ掛けるのもいいけど、私は、その、そのままの八幡でいいと思うわ」

何ですか、そんな事言われると勘違いしちゃいますよ？

「そ、そうか」

もうメガネ装着状態の俺は他人には見せないと決めた瞬間であった

初めての事件

それは、突然訪れた

俺と高山、岩泉が女子達に置いていかれて、事務所内で昼飯を食べていた時

ガチャ

「はあはあ、たっ、ただいま、戻りましたっ、はあはあ…」

小海が息を切らせて事務所へ入ってきた

「いつ、飯田班長！」

「だからあ、班長はいいって言ったでしょ？どうしたの小海さん。ランチもいいけどお、あんまりゆつくりしてたらあ、午後からの仕事に間に合わなくなっちゃうぞ」

いつも通り笑いながら言っているが、小海の顔には余裕がまったくない

「それどころじゃないんです！桜井さんと！西木野さんがっ！」

「ねっ、とりあえず落ち着こうよっ、小海さん」

胸に手を乗せて、深呼吸を繰り返して息を整えた小海は、叫ぶ様に

「桜井さんと！西木野さんがっ！ひったくり犯を追いかけて行っちゃったんです！」

「ええっ！」

高山が飲んでいたお茶を吹き出しそうな勢いで言った

しかし目の前では大騒ぎだが、岩泉は眠ったままだである。事件と聞けばすぐ起きそうだが

「桜井さん。ランチの帰りにコインロッカーの前を通ったら、荷物を入れようとしている女性からバッグをひったくるのを目撃しちゃって、私と西木野さんには相手か男二人組だから応援呼んできけて言ったけど、西木野さんが「私も行くわ！」って行って…」

「ロッカーの辺りって死角も多いしなあ、人気のない時間だからあ…それを狙われちゃったのねえ。にしても…そう…桜井さんと西木野さん、まだ二日目なのにね…ふうくん」

飯田さんは腕を組んだまま、何度も頷いている

「班長！そんなに落ち着いてないで、何とかしてください！」

小海が焦っているとうと、飯田さんは俺と高山の方に向かって言った

「じゃあ、高山君。君を班長代理、比企谷君を班長代理補佐にそれぞれ任命します。ひったくり犯を追いかけている桜井さんと西木野さんを4人でバックアップしてあげてください」

ガシャン！

「はっ、はい（ひゃい）！必ず犯人を捕まえて戻ってまいります！」

突然だったから囁んじやったよ

「わっ、私はすぐに着替えて来ます！」

そうだ、岩泉が寝てるままだ。一応起こしておくか

「おーい、岩泉、起きろー」

「……」スヤア

「事件だぞー、起きろー」

ガバツ

「俺は準備完了だ！早く行こう！」

事件と聞いた瞬間、急に跳ね上がり、腰に警棒を左右両側に1本ずつ差して立っていた

「では、行きます！」

「はーい、いってらっしやーい」

とりあえず廊下に出て、高山が桜井にコンタクトを取ろうとする

「小海さん！桜井の携帯番号知ってるよねっ」

「あっ、はい！知っています」

「すぐに電話かけてらそして桜井が出たら代わってくれ！」

「分かりました！」

「俺も西木野にかけてみるぞ」

「おう。なんかわかつたら言ってくれ」

繋がるかは分からないが、とりあえずかけてみる

ちなみに連絡先は何故か短期講習の最終日に交換している

親父にお袋、小町しかなかった連絡先に、西木野が増えただけだから、探すのも容易である

プルルルル、プルルルル

「もしもし、私だけど」

「手短に聞く、今どこだ」

「京浜東北線のホームよ。それより早く来て。犯人が電車で移動しそうでだから」

「何行きに乗るんだ？」

「大宮行よ。それが何かある？」

「わかった。何とかして追いつくなり追い越すなりして間に合わせる。あとなんかあつたらL I O Eで頼む」

「わかったわ。それと八幡。私達がいるのは二号車の所。犯人は金髪と赤い帽子の二人組よ。またなにか分かつたら連絡するから」

そういつて電話は切れた

その後L I O Eで、男達は「さいたまス〇パー〇リーナ」に向かっていると来た

ここで適当に短期講習の帰りに買った時刻表やらで身につけたいらん知識が役に立つ

「高山。西木野達は京浜東北線で移動する犯人を追いかけるそうだから、俺達が大宮まで先回りするってのはどうだ？」

「よし。飯田さんに一応話入れとくよ」

「助かる。なあ小海、東京から大宮だと新幹線の方が速いよな？」

「えっ、そ、そうですね。多分あおいたち乗る電車は、東京駅13時8分発で、大宮に13時50分に到着すると思うんです。そうすると、東京駅を13時20分に出る東北新幹線「なすの599号」に乗れば、途中で追い抜いて、大宮駅に13時45分に到着して、先回りできますよ」

俺と高山がぼかーんとしていると、高山が

「こっ、小海さん時刻表全部覚えてるの？」

「えっ!?!えっど…はい…」

「時刻表鉄だっけ?小海さん」

「いえっ…東京駅へ配属って聞いたので、一応…覚えておうかと思

まして…」

「それで、全部覚えたの!?!」

「いえっ! そんなっ1冊は無理ですよっ。東京駅に来る列車だけですっ!」

「よしう、じゃあ新幹線乗り場へ行こう!」

「どうしてだ?」岩泉が不思議そうな顔で聞いた

「とにかく俺について来い!小海さんも行こう!」

4人で新幹線ホームへとひた走る。

しかし、地下通路にはお土産を買う人、これから旅行にでも行くのか大きな荷物を引っ張っている人等でいっぱいである

しかも小海は既にへろへろ

時間に少し余裕があるとはいえ、このままでは間にあうか分からない

「私は…ここへ置いていってください!」

すると岩泉が、とんでもない行動に出た

「小海、ちよつといいか」

岩泉がしゃがむと、足の後と腰に手をいれて一気に持ち上げた

俗に言うお姫様抱っことかいうやつである

「きやつ!岩泉君!」

「お前がないと困る。しっかり掴まってる」

実は岩泉ってあざとかったりするの?!

そんな邪念は取り払い、ひたすら走る

「すいませー!ー!ー!ん!公安隊が通りまー!ー!ー!す!」

高山に先導してもらい、東北、上越、北陸新幹線改札口を通り抜ける

なすの599号は23番ホームに来るようだ

岩泉は小海を抱えたまま、階段を一気に登りきった

ホームに上がると、新幹線は滑り込んでいた

ドアが開くと、俺たちは飛び乗った

デッキに入ると、岩泉は小海を降ろした

「あつ、ありが…とう…岩泉君…」

「警四の仲間だからな…」

グイツと伸びをした岩泉は

「疲れた〜自由席にでも座るか」

「お、そうだな」

「鉄道公安隊は、列車には立ったままで乗るんだっ」

「えっ!? そうなのか?」

「座席はお客様のものだからな。長距離移動の時だけは自由席が空いていれば、一応使つていい事になっているけど、短距離の場合は基本的にダメだ」

「げええ」

「うつそだろ…マジか…」

小町：もしかしたらお兄ちゃん数日中にダメになるかも

西木野達を乗せた京浜東北線、俺たちを乗せたなすの599号はそれぞれ大宮駅へと向かう

「高山、大宮に着いたあとはどうする」

「ああ、まず俺が職質をかける。普通は認めないと思うけどさ。まあ、とりあえず事務所へ行きましようってことで、もっていくぞ。岩泉と比企谷は犯人が暴れた時に制圧を頼む。一応念の為に言っておくが…相手から攻撃された時なら、ある程度は正当防衛で成り立つからな…」

「おう…その時はまかせとけ!」

岩泉は歯磨き粉のCMのような真っ白い歯を輝かせて笑う

「小海さんは大宮の公安室に応援を呼んできて。犯人の身柄を押さえたら大宮の公安室の人達に引き渡すから」

「わかったわ。高山くん」

「一応確認しておくが、西木野が見た限りじゃ、1人は金髪。もう1人は赤い帽子が目印だ。乗ってるのは2号車だ」

「よし。何としても押さえろぞ」

「了解!」

「それと…公安隊は警察官じゃない…お客様を犯人のように疑うよう

なことは絶対にするな！」

「そういや、短期講習の時、五能隊長が言ってたな

「ほかのお客様の迷惑になるような奴は、どんな理由があろうとも戦え」と

いくら捻くれてる俺でも、ひったくりみたいなのは卑怯な手は絶対に許さん

高山が交渉する傍ら、俺と岩泉は犯人の暴走に備える

「あのお、恐れ入りますが、少しお話を伺わせていただいでよろしいでしょうか？」

「おうこらっ！国鉄はお客様を犯人扱いする気かあ！」

高山よ、心を強くもて

「いえいえお客様、わたくしどもはお話をお聞きしたいと言っているだけで、何も犯人扱いなんてー」

「じゃあよけろよう！話聞きたきや礼状持って来て逮捕すりやいだろー！この国鉄の警備員ごときがっ」

「えーつとですね。我々は鉄道公安隊でございましてー現行犯であれば…そのお逮捕もー」

そこに金髪がさらに前に出る

岩泉が「そろそろ行くか？」と鼻息荒く聞いてくるが、とりあえず「待て、まだその時ではない」と押さえる

「おお！誰が何見たってんだ！俺達は何したってんだ！こらあ！」

「まあそれも…事務所の方で詳しく…」

「私が見たって言ってるのよ！このひったくり犯！」

「関係ないやつはすっこんでろよ！」

桜井は不敵そうにニヤツと笑うと、公安隊手帳を出して言った

「東京中央鉄道公安室！第四警戒班、桜井あおい！」

「同じく第四警戒班、西木野真姫！」

…頼むから煽らないでください、お二人共

「この動輪にかけて、お前らが東京駅で女の子からかばんを奪ったこと、私が証言する！」

「なっ!?お前らが公安!?!」

「つまり、アンタ達は現行犯ってことよっ！」

西木野が最後にダメ押しする

「私も見たよ。そいつらを東京駅のコインロッカーでな」

ふつと見ると、黒いスーツを着た人が立っていた

「ありがとうございます。応援感謝します」

「私も鉄道が好きでね。あまりこういう下品なのは好かんだけさ」

ニコニコと笑って軽く手を振った

：…なんか、俺のぼっちセンサーが危険を察知した気がする。一体何だろうか：

そして次の瞬間、黙っていた赤い帽子が、高山に右手を突き出してきた

高山は後ろへよろけたため、バランスを崩し尻餅をついて倒れた

「岩泉、今だ！」

「おう！まかせとけ！班長補佐！」

岩泉はひったくり犯に向かって飛び出すと、警棒を両手につかみ、手をクロスさせてから取り出す

伸びきったブレード部分は50cmほどの長さになり、グリップは滑り止めに黒い牛革が巻き付けられている

俺もこっそり犯人の後に回ろうとする

ステルスヒツキーを駆使すれば造作もないが、万一に備えゆーつくりと進む

「あんたもナイフ出さないの？そうしたら銃殺できるのに！」

「ごちやごちやうるせーぞ。要するにお前が証言できなくなりやいいんだらうがあ！」

金髪は桜井の顔へ突き出した

：…そんなことしなけりや反撃されることもないのにな

桜井は顔をほんの少しずらして避けると金髪の腕を取り、その勢いのまま足を払った

「そりゃー！」

柔道でしようか

「ひったくりの現行犯、確保！」

桜井が金髪を確保した頃、小海が増援を連れて戻ってきた

しかし、それに気を取られた岩泉に向って、ナイフを繰り出した
しかし！そんなものはステルスヒッキーを前にはもはや敵ではな
い

気付かれることなく赤い帽子の後に回った俺は、警棒を伸ばし、男
の首に向って思いっきり警棒を振り抜く

聞いた話だが、首には神経が集まってるらしく、そこを圧迫すれば
気絶させることも可能なんだとか

「とりやあつー！」

「あはう!？」

赤キヤップは苦しそうな音を出し、ホームに倒れると、何故か動か
なくなつた

「なあ…岩泉。これ、大丈夫…だよな？」

「ああ？首の裏を圧迫しただけだろう？そんなん気絶するだけで死には
しないさ」

「そうか…」

危うく人生真つ暗になるところでした

俺達が一段落したと油断したその時

金髪が起き上がり、高山の後頭部を殴つたのだ

「…たくつ…：…ガキがあ…」

高山は桜井に被さるようにして倒れる

流石の桜井も身動きが取れなければ戦わない

しかし、金髪が狙つたのは桜井ではなく、その横にいた西木野だつ
たのだ

「へへっ！お前もくらえっ！」

「西木野！危ない！」

どこにそんな勇気があつたのか。俺は西木野に覆いかぶさるよう
に飛び込む

そして俺の背中には、衝撃が来る…：…はずだった

「あうっ…」

後を見ると、今度は完全に白目を剥いて倒れていた

「大丈夫か？あおい君とその君、それに真姫君と君も」

さっきのスーツの人が、AEDをケースごと持って立っていた

「はい、大丈夫…みたいです。助かりました」

「君達のような勇氣ある若者が、まだ国鉄にいたとはね」

「ご協力感謝します」

「国鉄、好きなんですか？」

「それはちよつと違うな…私は鉄道は好きだが、今の国鉄はどうも…」

「そうですか…すみません」

「いや、君が悪いわけじゃないさ、それにー」

やはり何かあるな…そう思った時に大宮公安室の隊員がドヤドヤと駆けつけ、犯人達に手錠をかけて捕まえた

「危ないところを、本当にありがとうございます。よかつたら、お礼もありますので事務所の方へ」

「それには及ばんよ。私は自分が正しいと思ったことをしているまでだ」

そして、大宮公安室の室長と思われる人がやってきた

「高山直人班長代理以下、東京中央鉄道公安室第四警戒班6名。ひつたくりの現行犯を追って参りました」

その人は優しく笑いながらいう

「ごくろうさん。警四といえはまだ研修生なのにすごいな」

「いえ、たまたまです」

「飯田班長からすべて聞いているから、あとは任せてくれ」

…飯田さん。本当にありがとうございます

その後というもの、犯人を大宮公安室に引渡し、桜井はひつたくりに関する証言をして、東京駅へと戻った

俺達が大宮公安室の事務所へ行こうとした頃には、スーツの男はAEDを残してその場を去っていた

「はあ〜」

中央鉄道公安室入口の前で高山が大きな溜息をついた

「ただいま！戻りましたア!!」

もはやヤケクソとも言える大声で高山が叫ぶ

「おかえり！」

「よくやった！怪我はしてないか？」

「おつかれさん！もう一人前だな！」

何故か拍手共々、歓迎の言葉をかけてくれる

多少照れながらも、警四まで歩き、飯田さんの前に並んで立った

「高山、岩泉、比企谷、桜井、小海、西木野、ひったくりの現行犯をと

らえ、大宮公安室へ引き渡してまいりました」

飯田さんは席を立ち、いつも通りにつこり笑うと

「よくやったわね、怪我はないかな？」

「はい、大丈夫です班長！」

「そつかあ：鉄道公安隊はスリを捕まえられれば一人前って言うのよねえ。だから、君たちはもう一人前ってことねっ」

全くもってそんなことはございませぬ

「いえっ！まだまだ半人前ですので、今後ともよろしくお願いします
！」

「はくい分かりましたあ。でも：研修期間中に犯人を逮捕した学生は、過去には一人しかいないんだからねっ。君たちはよほど優秀なのかなあ、それとも：変な奴ってことねっ」

全くもって優秀でございませぬ。超変人ですね

「今日は大変だったでしょう？もうみんなあがっていいわよ」
「よしっ！」

岩泉は大変喜んでいます。お前喜びすぎだつて

「あつ、それから：高山君はしばらくそのまま班長代理ねっ」

よっしや！俺は無いんだな！やったぜ！

「あ、それと比企谷君も班長代理補佐ね」

ええー………

「おつ、俺には……」

「うまくできたじゃない」

「いやいやいや、それは本当に偶然であつて」

「私はいいわよ……それで」

「うん。私も賛成です」

「別にいいんじゃない?」

女子3人は賛成するわ、岩泉に関しては「いいんじゃないの」って感じで親指を立てている

「分かりましたよ…比企谷八幡、班長代理補佐、引き受けます」

「はいはい!高山直人、つつしんで班長代理をお引き受けします!」

「はくい。じゃあよろしくねえ」

今日は長い1日だった…さっさと着替えて愛しの千葉に帰ろ…

ロッカーで学生服に着替え、公安室を出ると、何故か西木野がいた

「あ、やっときた」

「いや、やっともなにも俺待たせた覚えはないぞ」

「別に急かしたことは無いわよ。私が待ってただけなんだし」

「そうかそうか。じゃあ俺は帰るぞ」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!ちよつとつきあいなさい!」

「んだよ。ならさっさと済ましてくれ」

「その…次の非番の日、暇だったら…その…少し、付き合ってくれない?」

「あーちよつと予定」そうよね。暇よね。じゃあ、時間とか場所は後で

LINEするから。じゃあね」

「お、おう…じゃなあ」

ささようなら…俺の休日……

カシオペア、そして帰還

大宮駅でひったくり犯を取り押さえた後、俺たちに訪れたのは休息……ではなく、事件だった

東京駅に爆弾を仕掛けたと言い、現金数億円を要求。おおよその一日の売上額を知っていたことも見ると、職員、又は内通している者がいるのだろう

高山と小海が現金の受け渡し時に取り押さえたものの、犯人はその人物、手宮（仮称）の身柄の引渡し、及び要求額を2倍にする、つまり国鉄への被害が大きくなってしまったのである

しかし、現金を渡せば爆弾の設置場所と解除方法を教えるという、交換条件を出てきたら、国鉄はお客様の安全を第一に考える以上、応じるしかない

しかし、高山が爆弾の場所がわかったかもしれないといえは、なんとそれは高山と小海が先日回収した忘れ物のチワワのペットキャリーだったのである

普通なら爆弾を見つけたら、爆弾処理班に処理してもらおうものだが、桜井が処理を始めてしまい、それに高山も付き合わされた

え？俺はどうしてたかって？西木野達とお客様の誘導をしてたけど？決してサボってないから。ハチマン、ウソツカナイ

それで液体窒素で爆弾を解除したまではよかったが、結局の所要求された現金は持っていないか。まあ東京駅が爆破されることは無かったのはよかったが

更には、アテラのベルニナ殿下の警備に当たれば、王族一族を丸ごと抹殺しようとした奴らに出くわすわ、列車は暴走したりと本当に大変だったわ

まあそれで編成丸々使用不能にしたからか、帰りは北斗星からカシオペアにグレードアップしたかな。そしてこのカシオペア、なんと個

室が存在せず、全ての客室がツインという正にぼっち殺しもいいころというのが率直な所である

当たり前といえば当たり前だが、高山は岩泉と同室になる。何せ岩泉は軒が物凄い。簡単に言えば京成バスの古いヤツ、俗に言う7Eのエンジン音並のうるささである

もちろん桜井と小海が同室。必然的に俺と西木野が同室になってしまう

もちろん俺と西木野は断固拒否したが、抵抗虚しく結局同室になった

更に何を思ったのか、飯田さんが抑えたのかは知らないが、普通にカシオペアツインを3部屋抑えればよかった所を、何故かカシオペアスイート3室を抑えていたのだ

しかもその内1室は、展望タイプの部屋である
ここで誰が展望室スイートを使うかという話になる。

別に俺はどつでもいいんだが、高山は大興奮するわ、負けず嫌いの血が騒いだのか、西木野と桜井と岩泉でジャンケンで決めることになった

え？なんで高山じゃなくて岩泉かって？高山は興奮しすぎなので小海が適当にお茶を濁してくれています

5回ぐらいあいこが続いた後、岩泉がグー、桜井と西木野がパーで岩泉高山ペアが脱落した

なんかその時に「アアアアテンボウシツスイートガアアアアア」なんていう悲鳴が聞こえた気がするが、きつと気の所為だろう。気の所為気の所為

そして桜井西木野直接対決となる。しかしここで重要なのは、2人とも大変な負けず嫌いであることである。初手から20回ほどあいこが続いた頃

「次が最後よ…」ハアハア

「いいわ、望むところよ」ハアハア

じゃんけんで息切れする奴なんて初めて見たぞ

「じゃんけん」

「ぽいっ!!!」

桜井？ 西木野

「ああああああ」

「ど、どうよ!」

3分間にも及んだ長いジャンケンは、西木野の勝利で幕を閉じた

ちなみに買ったあと見えない様に小さくガッツポーズをしていた西木野が可愛かったのは公然の秘密です。バレたらどうにかなっちゃいそう

という訳で、1号車1番に俺と西木野、2番に桜井と小海、3号室に高山と岩泉ということになった

しっかし何で飯田さんはプレミアチケットともいえる展望室スイートを抑えられたのか、謎は深まるばかりである

：まさか、北斗星が使用不能になるのを予知していたとか…？まあないか

そして16時頃、ステンレスボディの客車が札幌駅に入線する

高山によれば、この26系寝台客車は、このカシオペアの為だけに作られた客車で、1編成しか作られていないんだとか

よくよく考えてみれば、4室しかない1号車の内3室を公安隊が使うって大丈夫なんだろうか…

まあそれは置いて、扉を開き、部屋に入る

廊下を進むと、そこには2つのベットが並び、その奥に1人がけのソファアが2つ並ぶ

広いなあと感嘆すると共に、ベットの上にそれぞれ荷物を置く「にしても広いな」

「何回か乗ったことあるけど、確かに不便はしないわね」

こいつ何回かって、乗ることあんのかよ…

流石にもう疲れたので、ベットに大の字で横になる

「はあく疲れたあく西木野もお疲れさんく」

「ええ、八幡もご苦労様っ」

西木野は俺のベッドに、丁度俺の膝のあたりに腰掛けてきた

「それにしても、殿下を警護するだけなのに、まさかテロリストに襲われるなんて思ってもいかなかったわよ」

「そりゃ俺も同じだ。正直爆弾よりビビったわ」

「まあ、また八幡が守ってくれたから私はいいけどっ」

「っ／＼／それ言うかよ…」

そうなんだよ。北斗星の車内でテロリストに襲われた時、ドロップキックをもろ背中に喰らっちゃまったんだよな。まあ西木野が喰らうよりは遥かにマシだったんだが。

北斗星より設備はいいとは言え、道中牽引は札幌く函館間がDF5
1. 函館く青森間がED79. 青森く上野間がEF68―500と
なる

つまり所要時間にそこまで大差はない。本当に設備だけだ

列車が東室蘭を通過した頃、飯田さんが予約してたルームサービスで、夕食が運ばれてきた

恐らく、俺達が疲れているのを考えて、あまり動かなくてもいいようにしてくれたのであろう

運ばれてきたのは、カシオペア懐石御膳というもの。珍味三点盛り
に始まり、鳥賊だつたりと俺にはよく分からんものが多かったが、「こ
の帆立、なかなか美味しいじゃない」とか言ってたあたり、結構いい
もんなんだろう。美味かったし

先に俺がシャワーを浴びたのだが、その後西木野が入ろうとしたら
「見たらどうなるかわかつてるわよね」なんて言われた。そんな事し
ないから。絶対

これでもリスクターンの計算はできる方…だと思っ

その後は特にイベントもなく、西木野がシャワーを浴びている間
に、眠かった俺はベッドに寝転がってたらいつの間にか寝ていた。

人は眠りが深いと夢を見ないというが、あれは本当だと思う。俺は

目が覚めたのは翌日朝の6時頃。丁度郡山に到着した頃だった。気がつけば、目の前の機関車が赤いDF51から青いEF68に変わっている

とりあえずベッドから起き上がろうとして辺りを見回した時、事件が起きた

なんか横に誰かいるなあって思ったたら、すぐ横で西木野が寝てるんだからなあ。これって添い寝ってやつ？リア充爆発しろとか言えなくなっちゃうじゃん

確か、俺が寝た時は西木野はシャワーを浴びてたはず…つまり俺は最初は1人で寝ていたことになる。

「とりあえず、外出て頭冷やしてくるか」

西木野を起こさないよう、慎重にベッドから出て、廊下に出る

外を見ると、少しずつ朝日が上がってきていた

「ん？比企谷か」

「高山。何かあったか？」

「いや、岩泉の鼾がうるさくてさ…寝てる間は気になんなかったけど、1回起きちゃうと気になって寝れなくてさ」

「分かるぞ。二度寝出来ない時ってあるよな」

「あいつの鼾は本当にさあ…あれはキツイぞ」

「んじゃ、部屋戻るわ」

「俺も戻るか…」

なんか憂鬱そうに言ってるが、俺は知らない。うん、岩泉の鼾に悩まされているなんて知らない。

部屋に戻っても、まだ西木野は寝ていた

ただ、もう1回、西木野が何故かいたベッドで寝たら、起きた時蹴り喰らいそうだなあなんて思い、とりあえずソファーにもたれかかった

ベルニナ殿下の警護、北斗星で移動するだけだと思った今回の任務だが、上野駅のエレベーターで、故障とは言え桜井が閉じ込められたり、食堂車で何故か乱闘になったり、小海が誘拐されたり、機関車が暴走して、乗客全員が人質になったり…更には数発喰らってるし…

…今思い返すと、なんだか寿命が1年縮んでもおかしくない程の恐怖体験をしたような気がする

下手してらどつかで死んでたんじゃないかってレベル

まあ、西木野が怪我したとか小町の耳に入ろうものなら、数日は口聞いてくれなさそうだし、まあいつか

そして西木野が起きたのはそれから30分ぐらい立った頃。何故か寝た時のことは記憶に無いようで、普通に起きて、普通に「おはよう」って言うてきた

またルームサービスで朝食を持ってきてもらい、それを食べる。夕食は懐石御膳だったが、朝食は洋食にした

弁当ではなく、ちゃんと一品ずつ皿に盛られているんだから、寝台特急とは言え大したものだ

列車は宇都宮、大宮を経由し、終点上野に到着した

上野から東京までは、東北縦貫線で移動する

この東北縦貫線、これが開業したのはつい最近のことだが、宇都宮線・高崎線と常磐線、更には東海道線が直通した事によって、熱海から宇都宮まで乗り通しなんてことが出来るようになった他、常磐線からの列車が品川まで来るようになったのだ

上野から東京までは5分。途中駅に止まることも無く、東北縦貫線の列車は東京駅に到着した

「何やってんこよ高山あくあつくあ」

「あっそうだ!!けくよんちゃんに誰がエサあげてくれたかな?」

そのの方々、心配するとこ違ったりと色々と気楽すぎません?

「先行くぞっ」

空気も読まず岩泉が扉をドンつと開くと、何故か地鳴りのような歓声と拍手が聞こえた

『ウオオオオオオオオオ!!』

「よくやった!」

「今年の警四はすげえな!」

…果たして褒められるようなことをやったのでしょうか
とりあえず、俺たちは走って飯田さんのデスクの前で整列した

「高山班長代理以下6名、ベルニナ殿下のお世話を終え帰還いたしました！警護中は飯田さんや五能隊長、公安隊員の皆さん…そして國鉄職員の方に多大なご迷惑をおかけしました…しかも…しかも…」

「しつかりしなさいよっ！高山！」

あんたらは熟年夫婦か

「しかも！そんなご迷惑をかけた皆さんが助けてくれたおかげで、こうして帰ってこることが出来ました！本当に！本当に…ありがとうございました！」

俺たちは揃って頭を下げる

そして、またしても公安室は割れんばかりの拍手に包まれる

顔を起こしてみれば、飯田さんの目は真っ赤だった

「みんな！元気？」

「はい！」

「そう、良かった…」

飯田さんは目尻を1度だけ手で涙を拭った

そして、久しぶりに警四の自分の席に座った

…なんだか落ち着くような、なんだろうこの自宅のような安心感

その後、テレビでベルニナの会見が流れたが、その時に岩泉が「今、高山のことを好きって言わなかったか？」なんて言っつて、高山ホモ説が浮上したのは公然の秘密

再研修？いいえ高度研修です

俺のここまでの3つの出来事

1つ、なんか出勤したら机が綺麗になつてた

2つ、岩泉が大声で叫んだ！

そして3つ、何故か大湊室長がいた

そもそも大湊室長は基本的に室長室に籠りっぱなしなので滅多に姿を現さない、云わばレアキャラのような存在である

「ああ、どっ、どううかね〜新しい机の方は？ねっ、高田君！」

はて？この班に高田君なんていたかな？あつ高山ね、高山

「大湊室長。ありがとうございました。とてもいい触り心地です。」

机って触り心地で判断するもんなの？

「さすが高田班長代理！」

桜井は完全にわかってる上でわざと間違えてますね、うん

「おっ、俺は「そうか、そうか、高田君。ああ、全員もう座ってくれていいから、いいから」

高山直人班長代理、訂正のチャンスを失う（笑）

「おはようございます大湊室長。何かご用ですか？」

上官に向かつて喋り方はそれなんですネ、飯田さん

「今日から警四が出てくると聞いてねえ〜。そっ、そう！かつ、顔を見にだ、顔を」

いやあんた初めて来ただろ

「そっ、それとだなあ…南武本部長より『しっかり面倒なみてやってくれ』と言われてるしねえ〜あはっ、あははははは」

間違いない、その南武本部長とやらがメインだろう

岩泉に関しては警棒磨き始めたぞ

「たっ、高田君！」

「すみません。俺、高山です」

「へえ？高山君だろ。さっきからそう言ってるじゃないか」

…まさか無意識のうちに間違えているのか？

高山ももはや呆れたのか、そのまま話を続ける

「それで、なんですか？大湊室長」

「おつ、おお〜北斗星ベルニナ王子強襲事件では、ごっつ、ごっつ苦労さんだったねえ。あれには南武本部長もいたく感動されておられたよ〜」

これが中間管理職か…THE☆社畜って感じだな

「はあああ…今後はあんなことがないように致します…」

「いやいや、いいんだよお〜。今年の警四は元気があつていい！OJ
Tの星だよ〜」

「あつ、はあ…」

「大湊室長、そろそろ朝礼を行いたいのですが？」

「おお、そうか。では、今日は警四の朝礼に一緒に出させてもらおうかな。私からも報告が一つあるんだよ」

「室長みずからですかあ？」

「ああ、そうとも〜。とつても大事なことでねえ〜」

「わかりましたあ、では、連絡事項ですう。今日の受付はあ桜井さんと小海さんで、高山君と岩泉君は巡回パトロールをお願いねえ、いつも通りそれは基本で事件が起きたら重要な物を優先しておねが〜い。今日も1日ケガだけはしないよ〜にして頑張つて下さいねえ〜では、最後に室長どうぞお」

「ゴホン、例の北斗星の銃撃戦の経験を踏まえた高山君から『携行する弾丸が五発では足りないのではないか？』というレポートを出してくれたよねえ」

お前ほんとにそれ書いて出したのかよ

要約すると、桜井に生きて帰れたら銃弾が5発じゃ足りないつていうレポートを出すつて口約束をしたのが原因で、東京に帰った後しっかり書いたらしい

「すつ、すみません！あんなの書いてしまつて！」

「いやいや、いいよお〜若さ溢れるレポートはいいね！本部長もとても関心しておられた」

ああ、本部長〜大湊室長の構図が完全に出来上がってるなこりや

「そつ、そんな事態はもう二度起こるとは思えませんし」

「そんなの分らないでしょ？」

桜井はそんな事にはすぐ反応する

「いつも言ってるだろ！日本はそんなに危険なくにじゃねえよ！」

「そうかしら、単に発表されてない…っただけでしょ？」

ここからかなり茶番が続いたので省略する

「まあねえ、公安隊でも一二を争う弾丸の使用量を誇る警四には、オートマチック銃の訓練も含まれとる、鉄道公安隊高度教育研修に参加してもらいなさいとの本部長の御提案なんだよ」

……あれ？高度研修ってどういうこと？なんか上級者向けって匂いがプンプンするぞ

「まあレポートを出した高山君は決定として…どつ、どうかな桜井君」

「いいですよ私は。リボルバーなら6人ですが、オートなら十数人は極悪非道な男どもを射殺できるようになりますので…」

「あははは、しゃ、射殺はしちやいけないなあ。でも、その意気込みはいいね！とてもいい！それじゃ研修よろしく頼むよ、桜井君」

まず射殺しちやダメでしょ。そしてその意気込みを受け取っちゃちやう室長も室長だな

「俺は銃には興味はないぜ」

その通りだ、岩泉

「君にも頼みたいことがあるんだよ、岩泉君」

ギロツ「俺に？」

「特殊警棒についても採用してからかなりの年月が経っていて、今は新型が配備されつつあってね。この訓練はそれも入っているんだよ」

「俺は研修に行くぜ。新型はスタンガン付きのやつか？」

「あつ、ああ…わつ、私にはよくわからないからさあ…詳しくは担当者から連絡させるようにするからねえ」

岩泉に握られた室長の手は上下にブンブン振られている

「任せとけおっさん！この岩泉翔、『言語道断』頑張るからよっ！」

岩泉、言語道断の使い方かなり間違ってるぞ

「比企谷君にも、やってもらいたいことがあるんだあゝ」

「はあ、俺ですか」

俺得に目立ったこともしてないよ？

「比企谷君には護身術をやってもらいたいんだあ」

「はあ、護身術ですか」

「君の隠匿性には目を見張るものがあると思うからねえゝそれに護身術とかをプラスすればもつと生かせるんじゃないかなあゝ」

「わかりましたよゝ行きます」

「そうか！わかったよかった。小海君と西木野君もそれでいいかな？」

「あつ、ええゝ私はみんなと一緒にならそれでゝ」

「私は別にそれでいいわ」

「それじゃ、たぶん明日か明後日には研修開始だからゝよろしくゝ」

そう言った室長は、また猫背に戻り階段を上っていった

すると桜井は急転直下の勢いで機嫌が治る

「オートマチックかあゝ」

「よかったな桜井！これで弾切れしなくてよ」

「そうねえゝドイツ製かなあゝイタリア製かなあゝ」

しかし、喜ぶ桜井とは裏腹に、どこか浮かない表情の高山

何かあるのか俺にはわからないが、何か深いことを考えているのだらう

「た・か・や・まー！ー！ー！」

「うわっ！」

桜井が高山の目の前に行った

「何、いつもみたいなのにボケーっとしてんのよ？」

「ボケーっとなんかしていいないゝ考え事をしているんだ。俺は桜井みたいに能天気じゃないからなっ」

今日の高山、なんかツンツンしてんなー

「何言ってるのよ！学生鉄道OJTで鉄道公安隊高度教育研修受けられんのよ。素直に喜びなさいよ！今年の学生の中で私達が一番って

「ことじゃないの?」

「そりや桜井はいいだろうけどさっ」

「おい高山、もう少し抑えろ」

「あつ、ああ…わるい比企谷」

「鉄道公安隊と一緒にいくんだから、いいじゃない。これで、配属はかなり有利になるわよ。上手く行けば、最初から五能隊長の東京公安機動隊へ入れるかも。いやいや国鉄特別強襲班も夢じゃないわあ」

「俺はなっ! 国鉄へ入社したいだけだ! 鉄道公安隊員になりたいわけじゃないっ!」

高山の一言に、静まり返る警四

桜井は呆然と高山を見つめながら

「なっ、何よ…それ…」

「この鉄道公安隊の研修は、国鉄に入社するために全員が受けなきゃならない研修だろう? だから、仕方なく受けているんだよ…俺は…」

「高山も…鉄道公安隊に入るって…言ったじゃない…だから、私は…」

その時の桜井は、いつものイメージからかけ離れるほど、寂しそっ
だった

「あの時は…桜井が…」

桜井は、真新しいその机に拳を振り下ろした

「私が何だっっていうのよ! 自分の将来くらい自分で決めなさいよっ
!」

「そっ、そりや…そうだけど…」

「私が何を言ったかなんて高山の将来には関係ないでしょ!」

「そりやあの時そう言ったのは悪かったよっ。でもなあ!」

「でも、何よ!」

「は…い、朝礼はおしま…い。今日中に教育部から連絡はあると思
いますのでえ…夕方には皆さんにお知らせします。では、それぞ! の
業務を開始して下さい」

「でも! 高山が鉄道公安隊を——」

「桜井さん、お話聞こえませんでしたか?」

殺伐とした雰囲気の中、飯田さんはいつも通りだった

ガンツ「了解！はるかっ行くわよ」

桜井は小海を連れて受付に行った

「んじや、俺と西木野も行ってきました」

「は〜い、いってらっしや〜い」

今日の俺達の持ち場は午前中はパトロール、午後は事務仕事、という感じだ

「なあ西木野」

「何よ」

「もしさ…俺が研修降りるつつたら、お前はどようする」

もとより俺は、自発的に希望したのではなく、渋々参加しているのである

だから就職希望という訳でもなければ、公安隊希望でもない

「そうね…まあ別に私だけでも大丈夫だけど…」

「いないと少し…寂しいわね」

「そうか…」

「あくもうじれつたいわね！パトロールなんだから早く行くわよ！」

「うおっ」

西木野に背中を押され、公安室を後にする

その後、終礼の時に鉄道公安隊高度教育研修について飯田さんから連絡があつた

研修地は安中榛名、なんか艦〇れで聞き覚えがある気がするが気の所為だろう

明日、東京駅に7時半に集合…俺無理じゃね？前のりしないと無理？

足りない！『モノ』

東京駅20番ホーム

ここは北陸新幹線をはじめとする新幹線が発着するホームになる
なぜ朝の七時に、俺がここにいるのかって？

答えは簡単、グンマー帝国の地で高度研修をすることになってしま
まったからである

このためだけにいつもより家をさらに早く出るハメになった

何よりも研修中は小町に会えないのが辛い

まだ高山と桜井の雰囲気は悪いままだ

小海が気を使って「高度教育研修ってどんなことするんでしょうか
？」と話題を出したりもしたが、「そんなの行けばわかるわよっ」の一
言で終わるのでほぼ終始無言

俺たちははくたか507号に乗車する

3列側の座席に座るのだが、岩泉にしても高山と桜井に気を利かせて
いるのか、それともたまたまなのか知らないが

「おしっ！六人で旅行って言えばこうだなっ」

なんて言って座席を180度回転させて向かい合わせにする

もちろん不機嫌な桜井は「なんでよっ!？」と言うが、小海が「あお
いもいつまでも高山君のこと、怒ってないでさ…」

「私なこんな奴のこと、いつまでも考えないわよー！」
と制すが、

「じゃあ別に向かい合わせていいでしょ？」

と言われた桜井は反論出来なくなった

バツが悪そうに鼻を鳴らした桜井は、荒っぽく窓側の席に座り、足
を組んだ

すると岩泉が高山の方をひよいと軽くつかむと

「俺は通路側がいいからな、班長代理は…窓側」

と、桜井の前の席に高山を強制的に座らせた

「あつ、おい！」

しかし高山の抵抗虚しく、高山は桜井の前に座る

そして俺は真ん中に座らされ、岩泉はそのでかい図体を無理やり通路側の席に押し込んだ

「おい岩泉、もうすこし通路側に寄ってくれ」

「そりや無理だな、もう余裕がねえ」

「お前がデカすぎだろう!？」

「それは違うな、こんな昭和時代の体に合わせたシート車両を、いつまでも國鉄が走らせているから問題なんだ。平成生まれの俺が体を鍛えているのがわるいわけじゃない」

小海が桜井と高山を見ながら

「ほんと…二人とも素直じゃないんだから…」

「素直とか素直じゃないとか！そんなの関係ないでしょ、はるか」

「はあ…あおいも高山も、少しは話したらどうなの？」

西木野がきつかけを作っても、高山と桜井の関係はギクシャクしたままで、そのまま新幹線は研修所の最寄り駅、安中榛名に到着した
新幹線の中で何かあったかと言われれば、まあ高山が運転士を志望する理由を話していたくらいだ

「しっかし、本当になんもねえーな」

そう岩泉がぼやくが、そりやそうだ

駅の周りを見回したが、コンビニすら見当たらない

そこにあるのは、果てしなく続く舗装された道と区画整理された土地だけ

「研修をやるにはもってこいの場所だな」

「どうしてですか？」

「これじゃ、どこへも遊びに行けないからね」

「いいじゃない、私達は鉄道公安隊のっ！高度教育研修受けに来たんだから」

桜井は先頭を歩き出す

「俺だってそのつもりだ」

「別にいいのよ、高山は公安隊に行かないんだから、ここで帰っても。」

こんな研修受けなくても國鉄にはきつとはいれるわよ」

何気ない一言が、高山を傷つけた

「あおいーそこまで言う和无いでしょ！高山君が今まで一緒にやってきたことまで、全て信じられないって言うの!？」

桜井と小海はじつと睨み合う

しかし桜井のがフンつと前を向き大股で再び歩き出した

「素直に謝ればいいんじゃないのか？」

「うるせーな、そんなことで片付く問題じゃねえだろっ！」

いつもより強く言い返した高山に、岩泉もお手上げなのか、肩を竦め、黙って桜井を追うように歩き出す

一言で言えば、今の警四は分裂状態にある

「俺も行くか…」

榛名研修所は、駅から歩いてすぐの丘の上にあった。決して丘の上だからってカステラを分け合ったりしないよ？

開発が進めばここにも何かを建築するのかもしれないが知らないが、あるのはプレハブが大量にあるだけ

第201教室で待てと言われたので、そこでまつ

学校の教室を半分にしたようなスペースに、椅子と机が10セットほど置かれている

まとまって座ればいいものを、離れて座る

流石に俺達もお手上げて感じだ

前後二列になっているが、前列の1番左に岩泉、2つ開けて俺、その横に西木野、後列の左から2番目に高山、2つ開けて小海、桜井の順に座る

しばらくすると、いかにもベテランの風格をした、恐らく偉い人が入ってきた

「おう、待たせたな。俺はおめえらの高度教育研修を担当する成田哲也だ。と言ってもここでの研修所は、それぞれの個性に応じた技術を磨く研修だからな、俺は朝礼と終礼、それと全員で行う学科をやるだけだ」

「……」

誰も何も答えない

すると成田教官はため息をついて

「てめえらは半人前だろうがもう鉄道公安隊員なんだからよ。最初に受けた鼻タレ向けの研修みたいなのはここではしねえ。だから、一々声出せだの、挨拶しろとは言わねえてどよお…聞こえてんなら返事くらいいしたどうなんでい？」

「…はい…」「はい」「おう」「はあ…」「…はい」「…つたく…」

返事はしたが全員バラバラだ

「…本当にお前ら…あの噂の警四か？」

「あつ、はい…」

「ほお、そんなチームワークで、あれほどのことが出来るもんなのかい、お前ら？」

成田教官は人目見ただけで俺達がバラバラなのを見抜いたようだ

「すみません、ちよつと色々ありました…」

「そうかい…今回は楽しみにしてたんだがなあ。まあいい、それはおめえらの問題だからな。俺たちはいつも通りに高度教育研修を行う、どんな状態だろうが結果が伴えばよし、結果が悪ければそう報告するまでだ」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべた成田教官

「それしまや、研修スケジュールについてだがー」

成田教官は二週間に及ぶ研修日程について説明を始めた

最初の方は全員で受ける講習も多いが、すぐに個々への研修・講習が多くなっている。桜井は射撃と銃器、岩泉は格闘、小海は列車制御やマニュアル関連、俺は隠匿行動、西木野は応急処置や処置、そして高山はリーダーとしての指導…のようだ

研修所では日曜は完全に休日

水曜日に来たので、今週は今日含めて4日間研修し、1日休みになる

ちなみに完全寮制で、温泉風呂もあるが一つしかなく、時間制の入替え式とのこと

「それじゃあ！今日は1日目だから、短期研修の復習をやるぞっ」

俺達は以前一ヶ月かけてやった事を、手早く復習していった

鉄道公安隊はみだりに銃を撃ってはいけない、公安隊員が勝手に列車を運転してはいけない等…

あれ？なんか全て警四にあてはまるんじゃないか？

そんなこんなで1日目の講習は終わり、飯を食べ、風呂に入り、少しの自由時間の後就寝。

部屋は全員個室だ。つまり岩泉の軒に悩まされることは無い

そして研修所の朝は早い

かの松○修造までとは行かなくとも、朝6時に起床、6時半からグラウンドでランニング。2日目以降で全員が集まるのはここだけになった

そして土曜日、昼食を終えるとマイクロバスに乗せられ、車両基地までドナドナされた

「うおおおお…」

感嘆の声を上げる高山

そこには青色とクリーム色が塗られた機関車が、連結作業を行っていた

「横川軽井沢間にある碓氷峠は国鉄最大の難所だ。そして、台風による崖崩れなどの災害も多発し、多くの国鉄職員が犠牲になった場所でもある。明治以来ここを克服すべく多くの工事をやってきた。最初に鉄道が作られた時はアプト式だった。レールの真ん中にもう一本ギザギザレールがあつて、そこに機関車の歯車をガッチリ噛み合わせて登っていたんだ。今は旧線にしか残ってねえけどな。この頃は列車ごとに乗務員が六人必要ですであ、みんなチームで行動していたんだ。だからよ、リーダーになると他のメンバーを家に呼んで飯食わせたりしてな、上手く気持ちを合わせようと苦労したもんだ…」

思い出すように一息ついた成田教官は続ける

「それからだあ、列車の走行技術も進化したつつうゆで、こっちに新線を作ったんだ。それでも最大67.7パーミルの傾斜は残っちゃまってるけどな…そして、最近になって北陸新幹線がトンネルと橋梁でズ

バツと山をぶち抜いて作られたってわけよ」

「なんだ、その67・7パーミルってのは？」

「1キロメートル走ると、高さが約66メートルも上がっちゃうってことよ」

「そんなもんか…」

「岩泉、そんなもんかじゃねえ。鉄道での67・7パーミルは物凄い坂だって思っておいたほうがいいぞ。登る時は強力な電気機関車の補助を受けなきゃ登れねえし、降りる時は機関車の方でもブレーキかけなきゃスピードがガンガン上がっちゃうんだからな」

「了解であります！成田教官」

岩泉、お前絶対分かってねえな？

「この新線を通る列車は、今でも麓側に補助機関車EF63二両を連結して、上りは押し上げ、降りる時はブレーキとして使用しているのはおめえらも知ってたの通りだ」

あれか、さっきいた機関車ね

「こいつは運転手研修でやるこつたから、本来おめえらには関係ねえんだが…せっかく榛名研修所まで来た土産だ。機関車の運転を体験させてやろう」

「ほつ、本当ですかっ！でつ、電気機関車の運転が出来るなんて、夢のようだよ！」

「高山君には出来ると思いますが、私にも出来るでしょうか？」

「一応、それぞれの機関車には熟練機関士もつくし、先頭を高山に任せてみんな支持に従えばそんな難しくはねえと思うんだが…何せ4人用だからどうしても余るんだよなあ…」

「なら、私と比企谷が外から見えます」

「え？俺も」

「別に、そこまでじゃないでしょ？」

「まあ、そうだが」

「よしわかった。今回は横川側へ3台、最後尾軽井沢側へ1台の合計4台を使用する坂を下る運転だ。横川側については3台同士で電話連絡できるが、最後尾の軽井沢側の1台はそれが無い。誰がその1台

を担当する?。」

「私が行きます」

桜井がすつと手を挙げた

高山が話しかけようとしていたが、声にならなかったようだ

「わかった…では、先頭機関車に高山、2台目には小海、3台目に岩泉だ」

高山が機関車に近づくと、何故か大きな声で叫んでいた

「げっ!?!?どうしてこんな旧型電気機関車なんだ!」

見てみれば、明らかに古そうなぶどう色の機関車が3台繋がれていた

「今回はちよつと操作が難しいED42だ。まあ、ここでしか体験できない機関車を触った方が研修になっていいだろ?それとこいつは協調運転できねえから、前後の機関車でうまく呼吸を合わせてやってくれや」

「小海さんと岩泉は電話連絡…桜井とは列車無線か」

「高山君、ED42に列車無線は無いわよ」

「そうだっけ?」

「おお、流石よく勉強しているな小海。その通り、この時代の列車には無線はねえ」

「じゃあどうやってタイミング合わせるんですか?」

「おう、そんなもん警笛と根性よ」

『なっ!?!』

警四全員で声を上げた

「無線が無くたって昔の運転手は事故ひとつなかったぜ、らそういうのも体験するのがここでの研修所ってもんよ。じゃあそれぞれの機関車に乗ってくれ。最低限のことについては、お前らの後ろに座ってる機関士が補助してくれるから、あとは自分らでなんとかしろ、全員準備はいいか?」

「…はい…」「はっ、はい!」「しゅっ!」「…ったく!」「はい…」「はい」

またしても全員バラバラ…

「では、乗車！」

「あんた達。足、引つ張らないでよね！」

「あつ、あおい……」

「おい！そんな言い方ないだろう桜井。それに警笛のサイン決めなくていいのかわよ!？」

「こんなおもちゃ、1人でなんとかするわよ」

そして打ち合わせもろくにせず、高山達はそれぞれの機関車に乗り込む

「なあ、比企谷、西木野。あいつらの運転を見てたらよお、必ず今の前から足りないもの、いや、もともとあったのに今失っちゃったもんが見えるはずだ」

「本当にそうでしょうか？」

「ああ……西木野に比企谷……それに高山達も、いい眼をしてるからな……」

「はあ……俺の目なんて腐ってるだけですよ？」

「お前の眼はなあ……人を見抜けるんだよ……きつと、それが役に立つ時が来るさ……ほら、そろそろ始まんぞ。しつわり見て、学んで、今のおめえらに無いモンを見つけ出してしろ！」

「はいー！」

『1番線、出発進行！』

「うわっ」

成田教官と列車近くの小さなプレハブのような建物に入って、モニターで高山達の運転する列車を見ていたら、急にスピーカーから高山の声がした

「おっと、言い忘れてた。この部屋から全ての機関車の運転席がモニターできんだ。これもおめえらに足りないもん探すには役に立つだろお」

「はい、ありがとうございます」

ジリリリリリリリ

「1番線から、16時44分発上野行急行白山が発車します。次の停車駅は、熊ノ平、熊ノ平。まもなく発車します。お乗りの方はお急ぎください」

騒がしいベルの音とともに、乗車を促す放送が流れる

ピョーピー

機関車の警笛が高々と響き、列車が動き出す…

ピョ

ピョピョー

ピョーピー

何というか、警笛もバラバラである

『時刻よし、はっ——』

ガシヤヤン!!グオオオオオオオオオオ

『桜井の奴っ!!早いんだよ!ブーブツツブーブー』

『何っ!』

『どうすればいいの高山君!?後ろからあおいがー』

『とにかくブレーキを緩めて!このままじゃ間の客車が脱線しちゃうから!』ガチャツ

高山は小海の確認を取らないまま、乱暴に電話を切った

さらにこのタイミングでなにやってんのよ!と言わんばかりの警笛が桜井から飛んでくる

「あちやくまあそりやサイン決めなきや息は合わねえな」

「教官はどうやって息を合わせたんですか?」

「ああ、俺達の頃はよお、警笛のサインも、打ち合わせももちろん大事だったが、何より一番重要だったのがよお『仲間』って意識だったっけなあ。さつき言った通り、こいつが現役だったころは列車無線もなかったから、ケツにいる奴には無線は使えなかった。だがなあ、一緒に飯食ってたりしてるとよお、気付かないうちになんつうんかなあ…繋がりみたいなものまできてんのよ」

「だからなあ、今のおめえらに足りないもんは、必ず見えてくる。寧ろ、前まではしっかりとあったんだからな…そうだ、今は忘れてるだけだ…ん、そういやこんなこと前も言ったっけなあ」

その時の成田教官の眼は、いつも通り鋭かったが、奥の方で何かを
重ね見ているようだった

い
その言葉に少し引っかけたり、その後のことはあまり覚えていな
い

だが、少しだけでも、垣間見たのかもしれない
俺達に今なくて、前にはあったもの…今、忘れてしまっている事が

…

軽井沢デート…？

…どうしてこうなった？

まず状況を整理しよう

シユミレーターをやった↓風呂に入ろうとしたら何故か高山が浴槽に浮いてた↓飯を食ってたら何故か西木野に明日軽井沢に連行されることになった↓今ココ

ちなみにもちろん非番なので私服である。更に西木野から眼鏡着用命令が出たため、目の濁りが取れてる状態である

俺はなんといかいつも通りのTシャツパーカー・ジーンズ

俺は自分をそう簡単には曲げないよ

西木野ももちろん私服なわけで。赤と白の猫耳パーカーにスカート、パンストというスタイル

なんというか、はい、可愛いです

ちなみに只今朝の10時にございます

「さっ、早く行きましょ」

「お、おう」

ねえ
しっかしこいつなんで休日の朝なのにこんなに元気なんですかねえ

軽井沢駅からすぐの所にある軽井沢プリ〇スショッピングプラザ

駅からほぼすぐの所にある大型ショッピングモールで、入間のアレみたいな感じだが、〇井ではなく、母体が国鉄である

俺は来たことは無いが、どうも西木野は来たことがあるらしく、西木野にされるがままの形で連れていかれているのである

「さ、早く入りましょ」

「お、おうって…どこどこだ？」

「何って、あなたの服をかうんじやない」

「へ？いやなん」「いいからさっさと行くわよ」あつ、はい」

店に入ると、店員と思われる若い女性が西木野の顔を見るなりやってきた

「いらっしやいませ、西木野様。お久しぶりです」

「そう固くならなくていいから、今日は私じゃなくて彼の服を選びに来ただけれども」

「あらあくもしかして彼氏さんだったり？」ニヤニヤ

「ち、違うわよ！／＼／＼」

「あ、あの…」

「あ、自己紹介がまだだったわね。私はここで真姫ちゃんが来た時に対応させてもらってる九条です。よろしくね」ペコリ

「あつ、ひ、比企谷八幡です。」

コソコソ「ねえ、真姫ちゃんとはどういう関係なの？」

「へ？いやただの同僚ですけど」

「付き合ってたりにしてないの？」ニヤニヤ

「いやいやそんな関係じゃないです」

「本当？キスもしてな」「何コソコソ話してんのよ！」「はいはい」

西木野と九条さんの関係性がイマイチ掴めないが、唐突に始まった俺の服選びは、なんだかんだで30分ぐらいで終わり、元々の俺とは似つかない格好になってしまった

「おい、こんぐらい俺が払うぞ」

「いいわよ、プレゼントつてことで」

「いいのかよ…」

「そのかわり、今日1日私はを退屈させないでね」

「へいへい」

西木野が会計をしている間に、九条さんが俺を手招きした

「先月あたりからかしら、なんか真姫ちゃん表示が豊かになったのよ。やっぱり貴方のお陰ね」

「は、はあ…」

「しつかりしなさいよ！カレシ君♪」

「分かりましたよ…」

なんとというか、ペース崩されるなこの人…

軽井沢駅からバスに乗ること約10分。三笠というバス停に到着した。アズオンにもいたね、三笠さん

そこから歩き2分、何やら洋風の白い建物が見えてきた

「あれが旧三笠ホテルね」

「ん？大和ホテル？」

「大和じゃなくて三笠よ…」

え？大和ホテルは知ってたけど三笠さんもホテルなの？

「一応説明するけど、旧三笠ホテルっていうのは、明治後期に作られた純正洋風建築よ。今は流石に営業はしていないけれどもね」

「へ、へえ…お前詳しいな」

「と、当然でしょ！私を誰だと思っているのよ！」ドヤツ
なにそれかわいい

「これ中入れんのか？」

「内部も公開してるわ。もちろん見学するけど」

「んじや行くか」

「ええ、そうね」

入口で入場料を二人分払い、中に入る

一言で言えば、なんとというか…日本の建築技術ってすげえなつて

思った

純正洋風建築でありながら、どこか日本らしさが漂う建物に、どこか感動を覚えた

「綺麗な建物ね…」

「ああ…本当に明治後期の建物なのかって思うぐらいにな…」

「つか明治にも水洗トイレってあったんだな」

「そこなのね…まあ、当時としてもかなり珍しかったそうよ」

西木野は木で作られた椅子に手をかける

「この椅子、軽井沢彫りっていうのだけれど、全部地元の職人が作ったそうよ」

「まあこの頃は家具の輸入とかあんまなかったからな」

「この家具、外人が気に入った時に持ち帰りやすいように、椅子の脚が分解できるようになっていたりするのよ」

「へえ、もしかしてお前ん家にもあんの？」

「そうね…持つてるとしたらパパ…お父さんかしら？」

「そのな…別に一々パパをお父さんって訂正しなくてもいいんだぞ？」

「も、もう！」プイッ

やっぱりかわいい

三笠ホテルを後にし、再びバスに乗ること約15分。白糸の滝バス停に到着し、歩くこと5分

「へえくなんつーか変わった形の滝だな。丸いつつーか…」

「沢山の湧き水が出たところを、滝に加工したそうよ。それでこの庭園みたいな形が出来たって」

「やっぱ滝の近くだと涼しいな。なんだっけ？マイナスイオンだか

で」

「ねえ、八幡」

「ん？うおっ」パシヤッ

滝の前で呼ばれたかと思えば急に寄せられてツーショット撮られました

「うん、いい感じね」

「お、おい／＼／」

「後でLINEで送っておくわね♪」

ちなみにその後、西木野のLINEのプロフィール画像がこれになったのは言うまでもない

ブー— ブー—

「ん？電話か」

スマホを見てみると、それは高山からだった

「悪い、ちよつと電話出るわ」

「わかったわ」

「もしもし」

「比企谷か？」

「いやお前分かってかけてるよな」

「それより今どこだ？」

「軽井沢の白糸の滝だが」

「悪いんだが、シヨ—記念礼拝堂まで来てくれないか？RJの脱走者を保護してくれて指示があったからさ」

「分かった。西木野もいるから一緒に連れてくぞ」

「分かった。着いたら何か連絡か合図頼む」プー

「西木野、悪いが今から移動するぞ」

「えっ、何かあったの？」

「とりあえず後だ。記念礼拝堂ってどこだ？」

「えっ、ええっ！／＼／＼ちよ、ちよっと！」カオマツカ

「ん？どうかしたか？」

「れ、礼拝堂って…」

「高山にR Jの脱走者を保護するから来てくれて言われたただけどな」

「……………へ？」

「ん、どうした？急に真顔 になら「なんでもないわよ！／＼／＼」あ、はい」

一体何をどう勘違いしたのか大変気になる比企谷八幡であった

ちなみに礼拝堂に着いたら高山と桜井と小海が修羅場だったのはまた別のお話

いざー！高千穂へ・・・？

♪ユメノナカデ〜エガイタ〜エノヨウナンド〜セツナクテ〜トキ
ヲ〜マキモドシテ〜ミルカイ〜

「ん？こんな時間に電話とか珍しいな、誰だ？」

元々学校でもぼっちの俺に、それも夕方になってわざわざ電話をか
けてくるやつなんてそうそういない

とりあえずスマホを手にする

「んーと…」

その画面を見てなんか嫌な予感がした

スマホの画面には、'警四'と表示されていたからだ

このまま出ないでおくのも手だが、俺が出ない限り永遠に鳴り続け
る気がするので仕方なく出ておこう

「はい…比企谷ですが」

「やっとでたあ〜比企谷君。非番なのにごめんなさいねえ〜」

「まあ家で寝ただけなんでいいっすよ」

「疲れてるのかなあ〜まあそれなら丁度いいかなあ〜？」

「はあ…」

「高山君にはもう話してあるんだけどねえ、警四のみんなに豪華温泉付き！九州横断の旅、プレゼント」

この時俺はなんだかもすごく嫌な予感がした

まず公安隊にこんな気楽な任務があるだろうか。そもそも警四のこれまでの任務は東京駅爆破恫喝事件の現金輸送、ベルニナ殿下の北海道までの警護、軽井沢でのRJ脱走者の保護、関東火力発電所同時爆破未遂事件といった傍から見れば学生がやっていいのかこれというものばかりだった。しかも爆破未遂とは言えど貨物ターミナルは爆破されてるし爆弾が仕掛けられたタンク車は海に沈めて爆破してるし…

そこから急に九州横断の旅なんて…ある訳が無い

「あの…飯田さん、ひとつ聞きますよ？」

「ん、なあに？」

「何かありますよね？」

「あらあ、比企谷君も随分と疑い深くなっちゃったわねえ、まあその通りなんだけどねえ…これにはね、ちよつと引つかかるところがあるのよ」

「はあ…要するにその調査を俺達にやれと」

「流石比企谷君ね、話が早くて助かるわあ、それじゃ、明日は4泊5日くらいの荷物を持って東京駅に来てねえ」

「そんなにかかるんすか…分かりました。」

「それじゃあよろしくねえ〜」

電話はそこで終わった

「はあくめんどくせえ…にしても引つかかるとこって何なんだか…」

「この夏の電力事情を反映し、車内の温度は25℃に設定させて頂いております〜皆様のご理解ご協力をお願いします〜次は馬喰町〜馬喰町です〜」

こう聞いてみると、公共機関では冷房の温度を28℃に設定する中、国鉄はそれより低い25℃にしているのだからいつもより少し涼しく感じる

本当なら今頃悠々自適で快適なぼっちライフを送っていたはずなのに、いつの間にかこんな死線をくぐり抜けるような生活をしている自分に身震いがする

今度の九州横断の旅も普通に旅行できる気がしない…

そんな恐ろしいことを考えながら総武本線に乗っていたらいつの間にか東京駅に着いていた

ロッカー室に入ると高山と岩泉が既に着替えを済ましていた…が

岩泉はいつものように片手指立て伏せをしていた

高山は普通に着替えているだけである

ここ2週間、火力発電所爆破事件以降は本来警四のあるべき姿であるお客様案内や忘れ物、遺失物対応といったものが中心になっていた
着替えも済ませ、一応制帽も被り事務所の一番奥にある警四に出勤する

「おい岩泉」

「ん？どうした班長代理補佐？」

「そのバカでかいバックは何だ？あと一々班長代理補佐じゃなくて比企谷でいいから」

一々班長代理補佐って言われるのもなんか癪だしな、ここで変えさせておこう

「了解だ！比企谷！あとこのバックはダツフルバッグつつつてな、軍が駐屯地の変更時にー「今から俺達がするのは駐屯地変更でもなければここは軍じゃないからな」そっか？でもこいつは便利だぜ」

いつの間にか要らん知識が増えてく俺がいる

「おはようございますー」

ん？警四にこんな普通の挨拶が出来るやつなんて居たか？なんて思ったがよく考えたら思い浮かぶ節が一つだけあった

「おはよう佳奈ちゃん。いいの？こんな朝早くから？学校は大丈夫？」

「はい、今日は期末試験明けで午後から部活で学校へ行くだけなので、桜井お姉様に、朝のご挨拶をと…」

「そっか、桜井はもう少ししたら来ると思うから待っていてね」

「あつ、はい…大丈夫です」

このなんか品行方正そうな制服を着た女子中学生は、北上佳奈ちゃんという

火力発電所爆破事件の時に犯人グループに誘拐された所を桜井に助けられ、それ以降ファンになったらしい

それから毎日のように学校帰りにここへ寄っていくようになり、最初は部外者だからと入口で待っていることが多かったが、いつのまにかココ最近は警四の机のそばにいるようになった

岩泉はダツフルバッグを大きな音が鳴るほど乱暴に床に起き、ドカツといつもの席に座った

「おつはよく高山くくん比企谷くくん。遊びに行く準備はして来たあ〜？」

「いや、遊びじゃなくて仕事ですよね？」

「まあほとんど遊びみたいなものだからあく気楽にねえ〜あ、そうだあ〜」

「他にもあるんですか？」

「すっかり忘れてたけど、比企谷君と西木野さんには別件に行ってもらってもいいかしらあく場所は九州で泊数も変わらないから荷物はそれで十分よお〜」

「俺は別にいいですけど」

「わかったわ」

「それじゃ、比企谷君と西木野さんは9時に東海道・山陽新幹線ホームへ行つてねえ〜あと何人が同行する人がいるって言つてたからあくよろしくねえ〜」

「了解しました…」

でもなんか不穏な空気なんだよなあ…何かありそうで…

そんな不安を抱きつつ、東京駅新幹線ホームへの階段を登つていき、ホームに出ると明らかに西木野の顔が青ざめていた

「ん？お前なんかあつたか？」

「べ、別になんで「あ！真姫ちゃん！」うげっ」

何故か西木野を呼ぶなりこっちにオレンジ色の髪の少女が駆け寄つてた

「もお〜遅いよ真姫ちゃん」

「わ、悪かったわね…」

「あれ？その男の人誰？」

「それよりも、穂乃果、それになんてよりによって全員いるのよ」

「え？真姫ちゃん聞いてないの？九州の…何だっけ？」

「高千穂ですよ、穂乃果」

「そうだそうだ！高千穂だ！」

あれ？俺存在空気じゃない？

「あつ、そうだ。初めまして！私、高坂穂乃果です！」

「申し遅れました。園田海未です」

「ひゃ、ひゃじめまして、ひきぎやや八幡です」

うわやつべ、めっちゃ噛んだ…

「穂乃果…で、なんで急に」

「理事長が飯田さんって人に、高千穂にでもどう？つわて言われたんだって。私達も聞いたのは一昨日だよ」

一昨日って俺たちより先に聞いてんじやねえか

「それで、これ何人いるんだ？」

「真姫ちゃんと比企谷君を入れて10人だよ！」

「絢瀬絵里よ。よろしく」

「ウチは東條希」

「矢澤にこよ」

「南ことりです。よろしくね♪」

「星空凛にやあく」

「こ、小泉花陽です」

「なんだよ…全員女子かよ…」

「あれ？男俺だけ？」

「それにしても絵里や希、にこはよくスケジュール空けられましたね」

「単位の計算はバッチリよ」

「あれえ〜1ヶ月前に焦ってたのはどこの誰やつけ〜？」

「の、希！」

「にこちゃんは大丈夫なの？」

「当然よ！」

「あの…早く乗らないと行っちゃいますけど…」

現在時刻	列車名	行先
924	ひかり334	西鹿児島
930		

発車時刻

「穂乃果ちゃん、何号車だっけ？」

「え？えくつと……5号車？」

「穂乃果……ここ12号車よ」

……は？

「穂乃果、急ぐわよ」

「あ〜！待って〜！」

たしかに5両目だが……それは16から数えて5両目だよな

ちなみになんとか間に合いました

いぢー！高千穂へ…？

はつきり言おう……

どうしてこうなった

東京駅へ4泊5日分の荷物を持ってくれば高千穂行を命じられ警四メンバーで行くと思いきや西木野の学校の奴と行くハメになるとは…

そんなこんなで、只今ひかり334号の車内でございます

更に飯田さんに電話で私服に替えてねえくなんて言われて只今私服でございます

こ一穂一海一通一凜一花

に一絵一希一路一八一真

「それで、真姫ちゃんと比企谷君は付き合ってるのかにや？」

「り、凜！そそそんなわけないでしょ？／＼／＼」

「本当く？でも凜にはそう見えないなあ」

「り、凜ちゃん、比企谷さんも困ってるから…」

「えくでもかよちんも気になるでしょ？」

「みんな、駅弁買ってきたよ！」

「全く…自分は何一つ持たないなんて…」

「いやあ、ごめんごめん…うおあつ！」

高坂が何故か躓いた

そしてこつちに倒れてきて俺の肩を掴んだ

そうすれば当然俺は西木野の方に力が加わるわけですから何を思ったのか星空が肘掛を上げてしまい…

結論から言うと俺は西木野に倒れ込む形になった

「……………」

「……………」

「な、何してるのよ！／＼／＼」バシッ

「い、いやいやいやこれは高坂が」

高坂の方を見てみればなんだかニヤニヤしてるし

「いいから！八幡はそこに座る！」

「いやだからだな「早く！」は、はい……」

ちなみにお説教？から西木野の機嫌をどうにかするまで新大阪に着くぐらいまでかかりました

小倉で日豊本線に乗り換え、延岡へ向かう

延岡からは國鉄高千穂線

ホームにはガロガロガロガロとアイドリングしている色がバラバラの気動車が2両据え付けられていた

「へえ〜なんか短いね」

「ちよつとー……この電車煙吐いてるけど大丈夫なの!?!」

「にこ……きつと蒸気機関車なのよ……そうよね？希……」

「絵里ち……これディーゼルカーや」

「海未ちゃん、ディーゼルカーって何？」

「ディーゼルカー……ディーゼルで動く電車でしょうか？」

「あーあれだ、ガソリンスタンドにある軽油で動く電車だ。ていうか電車じゃねーや」

「ほら、早く乗らないといっちゃうわよ。これ30分発なんだからん？今何分だ？」

—15:29 10—

29分じゃねえーかあー

しかもあと50秒

「急がなきゃー！」

「あ！待ってー穂乃果ちゃんー」

「ちよつと穂乃果！」

全員でなんとか間一髪間に合いました

もしかしたら高坂は高山桜井までとはいかずともかなりトラブルを呼び寄せているのかもしれない

ガロガロガロガロガロガロガロガロガロガログウオオオオオグ
ウオオオオオドンプスツドンプスツドンプスツ

ディーゼルカー特有のアイドリング音とエンジン音を奏でながら
走る高千穂線で揺られること数十分

目的地である亀ヶ崎に到着した

「はへえ〜何も無いねえ〜」

「穂乃果、ここに住んでいる方に失礼ですよ」

「確か、旅館の人が迎えに来てくれんじゃないっけ？」

「たしかそのはずよ」

「あの車やない？」

東條が指さす先には上半分がピンク、下半分がエンジ色に塗られた
マイクロバスらしき車がやってきた

∴のだが何故か屋根からマフラーが空に向かって突き出していた
りそのマフラーからエグい量の黒煙を吐いているが∴大丈夫なのか
？

その車が俺たちの前に止まると、扉が空いて眼鏡をかけた運転席の
女子が顔を覗かせる

「東京からのお客さんであってるよね？」

「はい。旅館広末の方ですか？」

「ええ、そうよ。それじゃあ適当に乗って！」

「はやくのるにや〜」

「あ、待ってよ凜ちゃん」

そんなこんなで旅館広末に向かう

途中の道で見た高千穂の風景は、とても綺麗で壮大だった

旅館、大浴場にて。

もはや一種のドライブのような送迎を経て、俺達が宿泊する旅館までたどり着いた

「ようこそ、高千穂へ。本日は『旅館広末』にお越しいただきありがとうございます。どうぞいますう」ペコリ

「それでは、お部屋までご案内しますので、高坂様と比企谷様に代表で宿帳の方をお願いできますかあ」

ん？なんで2人に書かせんだ？別に1人がまとめて書けば良くない？

「はあ、わかりました」

「はいー」

10人分：書くと意外と疲れるな

そこから2階に上がり、奥から3番目の部屋に案内された

「こちらへどうぞ」

カラカラカラッ

「うわくくっ！大きいね！」

「これなら窮屈しないにやっ！」

「こちらのお部屋に比企谷様と西木野様を除いた8名様と伺っておりますが」

「えっ？俺野宿？」

「ちよつと！どういうことよ！」

「比企谷様と西木野様はこちらのお部屋に」

そう言つてこの部屋の1つ横、奥から2番目の部屋に通された

「あ…2人にしては広すぎませんか？」

絶対20畳もいらんぞ？

「東京の飯田班長さんから「比企谷君と西木野さんは2人で同じ部屋でお願いします」と依頼されたものですからあ」

あの人のめ…いくらなんでも職権乱用だろ…

「ちよつと！布団が1組しかないじゃない！」

へ？と思った俺はよく見てみる

「…マジだ、1組しかない」

「こちらも飯田班長さんから「布団は1組だけで結構です」と伺いましてえ」

拜啓、五能隊長、あなたの同僚の班長がとんでもない職権乱用を繰り返しているように思えます。何故でしょうか

「ではあごゆつくりどうぞおく下の食堂で夕食もご用意してしますので
くお早めにどうぞく」

そう言い残し、女将さんはスッと部屋から出て引き戸を閉めて行っ
た

「んじや、俺が畳で寝るってことでいいか？」

「それじゃ全身痛くなっちゃうでしょ？べ、別に、布団が一つしかない
なら…いい、一緒に寝ればいいじゃない／＼／＼」

「……は？」

「べ、別に八幡だったら大丈夫よ…／＼」

「お、おうそうか」

「八幡だったらとち狂って襲ってきたりしないでしょ？」

「そ、そりや当たり前だ。こう見えてリスクターンの計算は出来る」

「それじゃ、ご飯食べましょ♪」

そう言って扉を開けたのだが、そのまま何故か微動だにしない西木
野

「ん？どうかしたか？」

その扉の先を見てみれば……

「あはは、見つかっちゃった」

何故か高坂以下8名がいました

「ほ、ほ、穂乃果……!!!」

その後30分ぐらい？お説教が続きましたとき

「おいしかったね〜」

「うん〜」

「このご飯も美味しかったなあ〜」

この通り、夕食を食べて各々の部屋に戻る途中である

夕食といっても、こんなん学生の研修生に経費で出してもいいのか
と言うぐらいの豪華な料理だった

魚に肉、郷土料理のようなものや固形燃料を使った小さな鍋だった
り…

でも小町には勝てないけどねっ！

♪アザレアヲ サカーセーテー アタタカイニワーマーデー

ツレダシーテー ツレダシーテー ナンテーネ

「ん？電話か」

「どうしたの？」

「電話来たから、終わったたら俺も部屋行くから先行っててくれ」

「わかったわ。あとでね」

さーて電話は誰か…ら…

— 着信 警四飯田班長 —

…ああ、この事の張本人か
「はい」

「ああ〜比企谷君〜旅行はどお〜？」

「いやなんで俺と西木野だけ別室で他は大部屋なんですか、別に俺達
もそっちでよかったんですよ？」

「だってえ〜公安隊だとお〜守秘義務とかいろいろあるからあ〜別々
にせざるおえなかつたのよお〜」

「…それ本当ですか？まあ本当っぽいですけど」

「それとお〜明日のお昼頃に〜高山くんたちがそっちに着くと思うか
らあ〜よろしくねえ〜」

「はあ…って結局全員ここじゃないっすか…」

「今日と明日は完全にオフで大丈夫だからあく明後日からは調査よろしくねえ」

「え？調査って何すか？」

「ああ、比企谷君と西木野さんには言っただけじゃなかったか。明後日からは高千穂線に出てくる幽霊の調査をお願いね」

「はあ、幽霊調査ですか、本当に幽霊なんているんですか？」

「いなかったら「幽霊なんて何処にもいませんでした」って書いた報告書を提出してくればいいからあ」

「はあ、分かりました」

「それじゃあく西木野さんにもよろしくねえ」

はあ…幽霊ねえ…

そもそも幽霊なんて出るんですかねえ

「入るぞー」ガララ

この時に何も確認せずに部屋に入った俺が馬鹿だったね、うん

よく良く考えれば分かった

ご飯食べればそりや風呂だよ

そうすれば旅館だし浴衣に着替えるよね

つまり……

扉開けたら下着姿の西木野がいたんですね、はい

意外な事にピンク！

俺たちは数秒固まるも、顔を真っ赤にした西木野に

「えっちー」

と言われ、すねを蹴られて扉をとんでもない勢いで閉められた

ただしすねはそこまで痛くなかった

その後というものの着替え終わったか確認して部屋に入り俺も浴衣に着替えた

そこから大浴場に行つて、風呂に入る

体を洗ってから湯船に浸かったのだが

「熱っ」

かなりの温度だった。思わずアツモリイイって叫んじゃうレベル

数十秒浸かっているとなんとか慣れてきた

「はあく癒されるく極楽極楽く」

大変親父臭いがこんな言葉しか出てこない
きつとそれは俺の社畜適性が高すぎるからだろう

あれ？これ俺社畜まつしぐらじゃん

「ん？露天風呂あるのか。とりあえず行ってみるか」

露天風呂に続く扉を開くと、THE☆旅館という感じの露天風呂があった

湯船に浸かってみたが、こちらは適温と言ったところだった
上を見あげてみると、そこには満天の星空があった

ビルが乱立した都会とは違う、何も阻むものが無い、一面の星空
空気が澄んでいるのか、より鮮明に見える星々の数々

「はあ…」

何があっても忘れられそうだ

「うわあーーーーー！綺麗な星空だね！」

ん？なんか物凄く聞き覚えのある声があったような。まあまさか混浴な訳あるまいし他人の空似だろうな

「ここまで綺麗な星空を見たのは初めてかもしれないわね」

「にやーーーーー!!!」バツシャーン!!

「こら！凜！湯船で泳いではいけませんよ！」

「今ならあまり人もいなし大丈夫にやー」スイスイ

「合宿以外で旅行したのって初めてなんやない？」

「そうだね、これまでは合宿ばかりだったから、単純に旅行するのは初めてだね」

あれ？なんか声が近くなってるない？

ビュウウウウーーーーー

その時、風が吹いた

「あれ？比企谷君？」

「ん？誰か呼ん…」

その先には一糸纏わぬ9人の女性がいました

「あわわわわわ」

なんでいんだと思ったらひとつの看板が目に入った

この露天風呂は混浴です、と

「お、おい、あの看板見ろ！」

とりあえず看板の方を慌てて指さす

「こ、混浴なんて…は、破廉恥な！」

「じよ、冗談でしょ！なんで混浴なのよ！」

「あれ〜にこっちは混浴はじめて〜？」

「あ、当たり前よ！」

そして東條がどさくさに紛れて西木野の背後に近寄り…

「ああ〜足が滑っちゃった〜」

「ちよ、ちよっと！」

そして、俺の方に倒れ込んでくる

なんとか俺も支えようとしたが…

バツシャーーン！！！！

俺が下になって見事に湯船に突っ込んだ

「あ、危ねえ…」

とりあえず何とかなったが、なんか右手になんというか、こう、柔

らかい感触がするんですが一体何でしょうねえ…

腕を肩の方から手に向かって向かって辿っていくと…そこには…

「おおお」

「あら、比企谷君って意外と大胆やねえ〜」

「は、破廉恥な！」

形のいい胸がありました。天国天国眼福眼福

「え、えっちー！変態！」バシツツ！

「うわっ」

そして俺は大して深くない湯船の底に沈んでいった…

風呂で一波乱あった後、何とか風呂場から脱出してから西木野の機嫌を治して寝たらいつの間にか11時になっていたのはまた別のお話

高千穂峡 　　神秘的なその中で 　　

昨日、浴場で一波乱あってから1時間後ぐらいに寝てからだいたい7時間。

あけだけやったのだから、もう少し寝れると思ったが意外にも早く起きてしまった。

千葉や東京といった都市圏のような騒がしさは無く、高千穂の朝は実に平穏だ。

窓を開ければ、いかにもO2が多そうな澄んだ空気が部屋に入り込んでくる。

そんな中で俺は……

いつも通りマツ缶を飲んだ

朝食を済ませてからは、今日一日高千穂周辺を観光することになったが、外に目を向けると何故かサイドから天に向かってマフラーが突き出し、ボディの一部に黒いガムテープで目張りされている車が駅の方角に向かって走っていた。多分、この旅館の車だとは思いますが、どこまで物騒な装備なんだろう……

旅館から割と歩いて高千穂峡にやってきた俺たちは、ボート屋のおつちゃんに2人乗りのボートを5隻借りて、高千穂峡を眺めてみることにした。いつもの俺なら他のペアが2人ずつ乗るところを、粗方残った俺だけが1人で乗っているのだが、どこかの誰かが

「じゃあ真姫ちゃんは比企谷くんと一緒やね〜」

なんて言い出したが為に

高坂&矢澤

園田&南

星空&小泉

絢瀬&東條

比企谷&西木野

という組み合わせになった：今日に限って人数が偶数だなんて：ちなみにボートに乗ったことは何度かある。乗る度乗る度小町に「お兄ちゃんが漕いでくれると小町のポイント高い！」だなんて言われちゃうから自然と上達しちゃうよね

「わあ〜！大きな滝だね！」

「ちよつと穂乃果！そんなに騒ぐと恥ずかしいでしょ！」

「いいじゃん！人もあまりいないんだから」

確かに、今は季節外れで俺たち以外にここに来ている人は全く見えない

空を見上げると、そこには荘厳な高千穂峡がそびえ立っていた

水面から天に向かって伸びている断崖絶壁な岩山を見ると、高千穂の神話の1つである、最初に神が降り立った地と言われても、信じてしまうほどに、神秘的だった

崖と崖に挟まれた高千穂峡は、その造りから太陽の光が差し込みにくく、僅かに差し込んだ光が水面を光らせていた

「綺麗な場所やね〜」

「そうね、海や川とは違った魅力を感じるわね」

「凄く綺麗だにや〜」

「見て！凜ちゃんあそこ！」

小泉が指差す先には、遙か上の崖、20メートルはあろうかというその頂点から、垂直に落ちている滝が、豪快な音を立てて落ち、その音が周囲に響き渡っていた

遮るものが何も無ければ、音が響く範囲は広くなる

「何だか、心が洗われますね…」

「うん、東京にはないよね」

本やドラマとかでよく言われているが、人は神秘的な光景をみると、何も言えない

「その…何か、凄いな」

「ええ、高千穂は神が最初に降り立った地と言われているものね。これを見るとそれも納得するわ」

「そういえば、ボート漕ぐの仗助ね。よく乗ったりするの？」

「ああ、よく妹と行ってだな」

「へえ、妹さんがいるのね」

「ああ、小町は世界一だ」

「うげえ、シスコン…」

「いや、そんな事はないぞ。それに最近小町が…」

だとか色々話してたら、結構な時間が経ってましたとき

やはり俺達は常に彼女の掌の上なのだろうか

高千穂峠を散策し旅館に戻る途中に、朝旅館の駐車場で見た、一部が黒いガムテープで目隠しされ、天高くマフラーが突き立てられた車が猛スピードで下って行ったが、誰か乗っていたのだろうか

豆腐屋じゃあるまいし

一路、旅館広末に戻ると例の車が敷地内に止まっていた。どこかで追い越されたのかと思っただが、俺達はみてないし別の道から来たのだろう。さつきはガムテープで隠されていた部分も剥がされたことにより見えるようになっていた。旅館広末と書いてあるし、やはりこの車だったようだ。

扉を開けて中に入ろうとしたが、扉に近づいた時物凄く聞き覚えのある声があった気がした。

「比企谷くん入らないの?」

「いや、ちよつと待ってくれ」

ある一つの疑いを持った俺は、恐る恐る扉に耳を近づけ、中の声を聞いてみた

「えっ!?それってどういうことよ!内子さんが何か間違えてるんじゃないの?」

「いえいえ、東京の飯田班長さんからのご依頼で6人一緒にしておいてと…」

『飯田さんがあ!?!』

「よっ、よろしいですか?」

声を聞く限りだと、女将さんは恐縮しているのだろうか

「はい。班長からの命令でしたら間違いありませんので、それで結構です。」

「だったらしょうがないじゃない…」

……昨日今日で起きたことをまとめてみよう

・ 5泊6日ぐらいの荷物を持ってこいと言われた

・ 何故か^μs 御一行と高千穂に行くことになった

・ 旅館に行つてみれば何故か西木野と2人部屋にされた

・ 旅館に戻ると高山御一行とエンカウントした↑new!

なんという事だろうか…結局警四が集まっているじゃないか…

まあ、まさか部屋が近いなんて事はないだろう…多分

「西木野、ちよつと来てくれ…」

「何よ?」

「ここの旅館に高山たちがいる…」

「えっ!? どういう事よ」

「俺も分からん…飯田さんがスケジュールは全部知って「それよ!」え?」

「私達が泊まる場所を手配したのも飯田さんでしょ?」

「まあ、多分そうだろうな。東京出た時も飯田さんが新幹線の切符くれたし…」

ん? そういえば高山達も何泊かできそうな荷物持ってたな…

「ねえ、早く入ろうよー」

「お、おうそうだな。取り敢えず入るか…」

「そ、そうね…」

「真姫ちゃん達どうかしたの?」

「い、いや。何でもないので…早く入りましょう」

玄関の扉を開けると、すでに高山たちの姿は無かった。もう部屋に行つたのだろうか? 色々考えを巡らせながら部屋に繋がる廊下を歩く。

さつきの高山達に女将さんが「6人一緒」というのが少し引つかかるが…俺と西木野が抜けているから4人のはずだ…他に誰かいるのか?

考えを巡らせているうちに、部屋の前に着いたのだが、何故か襖が少し開いていて、中の光が廊下にもれていた。誰か掃除にでも入つて

いるのだろうか？

「じゃ、真姫ちゃんとは比企谷くん、また後でね」

「じゃあね、希」

そう言つて扉を全開にすると、目の前にはとんでもない光景が広がっていた

浴衣に着替えている桜井と中学生くらい女の子がいた…

当然、浴衣の下には下着ぐらいいしつかない。つまるところ、パンツやらブラジャーやらが全て丸見えなのだ。あと桜井下着ブルーなのね。

俺も驚きのあまり、数秒間フリーズしてしまったが、我に返り「さ、桜井。俺は別に狙つて入つた訳じゃ「この変態!!」ぐはっ…」
強烈なアツパーを喰らい、そこからの記憶はないが…
覚えているのは、桜井の下着がブルーだったぐらいだ…

「……………さい……………幡……………きなさい……………八幡!」

「んん……………ん?俺どうしてたんだっけ?」

「入つたところをおおいに殴られたのよ」

ああ…確かに下着を見たのは覚えてるぞ。確か水色の「アンタ、今変なこと考えたんじゃないでしょうね」

「いらいや、断じて考えてない。小町に誓つてそんな事は微塵も考えてない。」

「煩惱退散、煩惱退散」

「あつそ。さつきは悪かつたわ。で、何でアンタ達もここの部屋にいるのよ」

「いや俺らはな、新幹線のホームに行つたらなんか西「えっ、九州まで新幹線で来たの!?!」

ん?高山達は新幹線じゃないのか?

「ええ、そうだけど。そつちは飛行機か何かで来たの?」

「冗談じゃないわよ！こつちなんて列車の中に24時間缶詰めだったんだから！」

「は？確か寝台特急でも24時間はかからないだろ？上野から札幌だって夕方乗ったら次の日の朝だったじゃねえか」

確か北斗星とかカシオペアの時もそうだったからな

「本当よ！東京駅から出たのが朝の10時で延岡に着いたのは翌日の朝9時よ！」

「そんなのあんのか：調べてみるから、列車名の名前言ってみる」

「確か：高千穂？だったかしら？」

「どれ：寝台特急高千穂：ん？寝台急行高千穂？なんだこれ…」

「これじゃないの？」

西木野さん。そんなにスマホ覗き込むと顔近いですよ。なんかいい匂いするし

「東京発10時、名古屋15時14分、大阪18時12分、岡山21時5分、広島発が0時17分…ここで日付変わってんじゃねえか…」

ムクツ「まったく列車の中でも寝れるっちゃ寝れるけどよお、あれなら外で寝た方がいいんじゃないか？」

「うわっ！岩泉いたのかよ！」

「いや、部屋に戻ったら班長代理補佐が倒れてるしよお、何か事件でもあったのかとおもったぜ」

「お、おう。そうだ、あと班長代理補佐だと高山と紛らわしいから俺は比企谷でいいからな。岩泉」

「了解だ！比企谷！」

「それで、下関には明朝4時18分、門司4時51分、大分7時18分、そして延岡9時50分。列車の終点の西鹿見島には14時20分。時間にして28時間20分か…こりゃ長いわ」

「そうでしょ！それに食堂車も車内販売もなく、車内で危うく遭難しかけたのよ！」

「うげえ…何よそれ…」

「そういや、小海は居ないし、何で中学生っぽい女の子もいるんだ？」

「ああ、そうね。比企谷は知らないのね」

「え？何？知らないの俺だけなの？」

ヒツキーマジヒツキーマジ…何言ってるか分からない…

「彼女は北上佳奈ちゃん。前に電車の中で痴漢に遭ってた所を、あおいと高山に助けられたそうよ。」

「き、北上佳奈です。よろしくお願いします」ペコリ

「ひ、ひきやがや八幡です」

……………

嗚んだああああああああああああああ

「ぷっ…」

ほら…何か笑うの必死で堪えてるよ…終わった…

「あははははははっ！やっぱり高山先輩の周りには面白い人たちばかりですね！」

「そ、そうか…」

その頃近くの部屋では…

「今度こそ勝ちます！」シユバツ！

「う、うくん……………」

(どうしよう…カード触った時の顔でバレバレだよお…)

「うくん…ごめん！海未ちゃん！」

「ああ…」

そこには、世界の終わりでも来たのかというレベルの顔をしていた園田海未がいたのであった…

高千穂（トランプ） 決戦

あの後、高山はこの女将さんの娘さん（確か花咲さんだったかな？）と聞きこみ調査に行ったため、今部屋にいるのは俺と西木野、桜井、岩泉に北上の5人だ。

「幽霊調査って、本当に幽霊なんでも出るの？」

「そんなの私も分からないわよ。そもそもこんな事、なんで首都圏公安隊が担当してるのよ？」

ちよつと遠く…いや、畳3枚ぐらい離れて、西木野と桜井が言い合いなのか愚痴のぶつけ合いなのか知らないが、そんなことを話している一方、

「178…179…180…」

岩泉に至っては、片手腕立て伏せを始めていた

「それで、高山先輩と桜井お姉さまはまだ付き合っていないんですか？」

「いや、多分まだ付き合っていないと思うぞ」

こつちはこつちで北上が桜井と高山のことを聞き出そうとしている

「そもそも高山だったら気づかないんじゃない？」 スタツ

「ん、それか？普通に気づくだろう」

「はあ…あなたも大概ね…」

そして、北上がとんでもない爆弾を落としてきた

「もしかして…比企谷先輩と西木野先輩って付き合ってるんですか？」

「いや、つ「そ、そんな訳あるわけじゃない!!!」カオマツカ

いや、そんなに否定されると寧ろ傷つくんですけど…

「ははあ…そういう事ですか…」 ニヤニヤ

北上もこつち見ながら物凄くニヤニヤしてるし…

「それで、幽霊調査って、具体的に何するんだ？」

そもそも幽霊調査って何？状態の俺が聞くと、桜井が呆れ気味に

「終電後の高千穂線の線路内に幽霊が出るそうよ。まあ実際そんなのは出ないんですけど」と答えてくれた。

「でも分からないんじゃない？スサノオの崇りとかの話もあるんだし」

「何よそれ、迷信じゃないの？」

「スサノオつてのな古事記に出てくる日本の神の1人だ。イザナギの鼻を洗った時に生まれ落ちた神で、高天原で暴れてアマテラスが大岩戸に隠れる原因を作ったり、出雲の国でヤマタノオロチを倒したりな。」

「よく覚えてるわね…」

「俺は文系しか出来ないからな」

「自慢になつてないじゃない…」

俺達がこんな話をしてしていると、北上が荷物を漁って、カードが入っている箱を持ってこっちへ寄ってきた。

「桜井お姉さま！トランプしませんか？」

「ええ、いいわよ」

「お、俺もやるぜ！」と何故か岩泉も食いつき

「私もやるわ！」と西木野も参戦する

あれ…これ俺もやらなきゃなやつ？

「比企谷先輩もやりますよね？」

「お、おう」

結論 : 回避することはできませんでした

こうしてトランプをする事になった。5人でやるわけだから、2人が10枚、3人が11枚の状態ですタートする。

俺の手元に最初にあったのは11枚。そのうち6枚が揃って、残り枚数は5枚になった。他はというと、桜井7枚、岩泉は11枚…こいつ1枚も減ってないな。北上は8枚、そして西木野が6枚だ。つまり少ない順に俺、西木野、桜井、北上、そんで一番多いのが岩泉だ。

親になった西木野から始まる。北上の手札から1枚取り、桜井、岩泉、俺の順番に回していく。

ちなみにジョーカーを持っているのは俺じゃない。ポーカーフェイスなんで出来なさそうな岩泉も持ってなさそうだ。

周りが手札を減らしていく中、俺の番になった。俺は西木野の手札から1枚抜く。今の俺の手札はハートの2・7、ダイヤのキング、スペードの1・9の5枚。取ったカードはスペードのキング、よって残り3枚。

「比企谷先輩、減るの早くないですか？」

「いや、これは運だろ」

「岩泉なんて1枚も減ってないわよ」

そう言われて岩泉の方を見てみると、カードを見ながら唸っていた。枚数も11枚。減ってない。1巡目で減らないってあまり聞かないぞ

なんかかんやで枚数を減らしていき7巡目。残り枚数は俺が1枚、西木野と桜井が2枚、北上3枚、そして岩泉が5枚。明らかに1人だけ多いぞ。

そして、残り1枚の俺は、次に岩泉がカードを引くと0枚になり、これで俺の勝ちだ。とか思ってたなら西木野も1枚になり、岩泉も1枚減らして4枚。そして俺、西木野、桜井の順で上がっていき、最後は北上と岩泉の一騎打ちだ。北上1枚岩泉2枚。つまり北上がジョーカー以外のカードを引いたら北上の勝ちだ。鬼の形相でカードを見つめる岩泉だったが、無情にもその手に残っていたのはジョーカーだった。

「ああー!!!誰だ!ハートのクイーンを出さないのはー!」

「知らん、お前の運が悪い」

「よし、もう1回やるぞー!」

岩泉の鶴の一声で2回戦が始まったが、何故かまたしても岩泉が負けた。更にもう1回やっていると、聞きこみ調査を終えた高山が帰ってきた。

「おかえりなさい!高山先輩!」

「ウツス」

岩泉は一言だけいい、またカードを見つめ唸っていた。

「聞き取り調査って、ずいぶん時間がかかるのねえ」

「あ、ああ。駅まで行って内子さんやお土産屋さんに詳しく話を聞いてたからな。」

「それで、何か収穫はあったのか？あと内子さんって誰だ」

「最終列車が言ったあとに高千穂駅から高森駅あたりで幽霊が目撃されてるってくらいだな。あと内子さんは九州鉄道公安隊延岡分室の公安隊員さんだ。」

俺が高山から調査結果を聞いていると、横から桜井が「運転手の子とあつちこつちドライブに行ってきたからじゃなくて？」とジト目で聞いてきた

「ええっ……!!高山先輩が女性とデートしていたんですか!」北上も目を輝かせている。

「佳奈、高山も女子だったら誰でもいいような…お・と・こなだよ」

「そうなんですか!?!高山先輩はすごいいい人で桜井お姉さまと唯一お似合いの人だと思ってたのに…残念です。」

「ちよつと佳奈!何変なこと言ってるのよ!」

顔を真っ赤にする桜井に対してなんか焦ってる高山は「あつ、あれはこの旅館の娘さんで桃世さんだ!駅まで遠いから送ってくれただけで、べつ、別にドライブしていたわけじゃない!」

「そうでしょうね…」

「ま、高山だものね」

西木野に桜井が続け、「そんなの分かっているわよつ、そんな事で大声を上げる方にびっくりよ。」

「高山先輩…実はああいう年上の方が本当は好みとか?」

桜井と北上にじつと目線を向けられた高山は「いつ、

いや…そんな事は無いよ…きつと…」と意味深な言い方をした。

俺から一言言わせてもらおう。お前ら付き合っちゃえよ

高森トンネル

夕食を食べた俺たちは、本題である幽霊調査へ向かうことになった。

向かい側の部屋から南の悲鳴が聞こえたけど気のせいだろう。うん。

ちなみに幽霊は終電が終わったあとに出現するんだから、調査に出るのは日付が変わることだと思っていたが、その幻想は見事に打ち砕かれた

「そんなに急がなくなたって終電なんだから、かなり時間はあるでしょ？」

「まだ9時よ。あと3時間ぐらいじゃないの？」

桜井と西木野に対して、高山は首を横に振り「ここは24時になっても列車の走る東京じゃないぞ。最終は延岡発高千穂行きで駅に到着するのは22時頃だ」

「は？そんな早く終わるのかよ」

「そんな時間で終わっちゃうなんて、沿線の人はどうやって生活するのよ？」

「多分かなり不便だろうなあ…高千穂へ22時着つてことは、延岡を出るのは20時頃のはずだから」

「午前8時で最終!?!そんなの不便じゃない」

「そうなんだよなあ…」

きつと昔は今ほど最終も早くなかったのだろう。ただ、山間部からも都市へ繋がる道路が整備され、鉄道を使っていた住民は車による移動が増え、需要の減った鉄道は年々減便していったのだろう。

「ねえ、八幡。もし高千穂線が無くなっちゃったら、沿線の人はどうやって生活すると思う？」

「いや、多分だが…元々住民の人が道路の整備が進むにつれて、車移動が増えて鉄道の需要が減少したんだとは思うが…この地域はあまり若い人はいない。どちらかと言えばお年寄りの方が多い。」

「確かにそうね。来た時あまり若い人は見かけなかったわ。」

「そうなれば車の運転ができない人も出てくる。今は高千穂線があるからいいが…廃線にでもなれば、医療とかが充実した都市部へ移住するだろ…最悪、この地域が無くなることだって…」

「あんなに綺麗な場所もあるのに…」

西木野はどこか悲しげな顔をしていた。

廃線に反対するから幽霊が出る？なんてことも考えたが、そもそも幽霊の存在が不明確なので今は胸の中にしまっておこう

その幽霊が出るといふ高森駅の近くまでは高山が昼間にデート？したというこの旅館の女将さんの娘さんの桃世さんのくるまでいくことになった。終電で高森駅まで行く手もあるが、そうすると帰りは現地から徒歩になるとさすがに危ないので、車でいくことになった。ちなみに山の多い地域ではバイクや車は必需品らしい。まあそりゃそうだ。

やがて車は30分ほど走り、高千穂線の線路が見渡せる場所に着いた。

線路にも道路にも街灯は1本もない。周りには民家が僅かにあるだけで、人工的な明かりはどこにもない。さらに今日は月もでていない。

しかし、真つ暗闇というわけではなく、目が慣れると結構周りが見えるようになってきた。

桃世さんは空を見上げながら「星明かりよ」と言った。

あまり人工物のない山奥で、空気が澄んでいるというのもあるが、地上に全く光が無いため、天の川がいつになく白く輝いていた。

星空の明かりに照らされたレールが、高森トンネルから日向泊駅まで続いている。

「…高森トンネルだって、掘るのは苦労したのにね…」

トンネルの出口を見ながら、桃世さんは寂しそうに言った。

「トンネルぐらいどこにももあるじゃない」

「あの高森トンネルを掘っている真つ最中に、温泉に当たってしまったて、それを食い止める作業が困難を極めたってネットに書いてあった

ぞ」

「は？温泉？」

高山はどうもこの件について知ってるようだ。

「熊本と宮崎を結ぶ九州横断鉄道は昔から國鉄の夢だったんだ。でも、震災やら戦争やらで工事は度々休止になった。それでも熊本側からは阿蘇の下を回って高森まで、延岡からは高千穂まで完全して、あとはトンネルでつなぐだけって時に、温泉に当たったらしい。」

「それがあの高森トンネルなのね…」

「やつと許可が下りて、トンネルを掘ってたら源泉に当たっちゃってね…周辺の井戸が濁ったりして、一時は工事中止も叫ばれたけど…國鉄の工事担当の人が「あと少しで温泉はおさまるから」って本社をものすごく説得してくれて、最終的には開通したのよ」

「それって、絶対凄いいお金かかってるでしょ？」

「ああ、きつと膨大な額の税金を使っているはずさ。そこまで苦勞して作ったのに、勿体ないな…」

「もつたいない？赤字で採算が取れなくなったなら仕方ない事じゃないのか？」

日本の企業でもそうだ。不採算部門は切り捨てられる。学校の俺もそんな存在でしょ。あれ、これ自分で言っても悲しい

「延岡から高千穂へ続く日本一の橋だって、このトンネルだって作る時には苦勞して作ったのに、それが採算が合わなくなったって言うだけで廃線にするのは、とても残念ですよ」

「高山君は本当に國鉄の人なの？」

桃世さんは眼鏡を直して、高山に向かって微笑んだ。

「まだ研修中ですから…」

なんか横から桜井がジト目というかよく分からない視線を高山に送ってるけど何なんだ？嫉妬か？とか思っていたその時…

突如としてトンネルからシャリリン…シャリリン…と鈴が転がってくるような音が聞こえたきたのだった…